明[illegible]月廿四日發行

女學

第六十一號

東[illegible]社

女鑑第六十一號目次

女鑑

育兒第一の心得

論說

女子敎育と婦德との關係(三)……黑河内與四郎

女子處世論(二)……三輪田眞佐子

史談

勝子……鹽井雨江

武林唯七が母……花山やすゐ

家政

看護法捷徑(三十六)……三笠舍主人

漫錄

あうむ文學(三) 楢の舍主人●道の志なり歌合(九) 久志本常

幸寄贈●衣通姬 荻野由之●帶のむすびかた(圖入) 井上賴文

●草根集(つゞき)

忠孝二筋道(其二)……渡部乙羽

文林

歌 近衛忠凞●東久世通禧●鍋島直大●黑田淸綱●前田利嗣●黑川眞賴●植松有經●小出粲●谷勤●内藤存守●坂正臣●片岡正占●西川須賀雄●糸山貞幹●藤井行麿●佐々木弘水●草野隆道●千日亮●森馬太●松島芳麿●鍋島榮子●松平健子●鶴久子●前田朗子●中島歌子●諏訪晴子●安東菊子●小川昌子●師岡須賀子●鹽井雨江●勝家貞民

文 月雪花優劣の論……勝家貞民

雜報

●國字四書●河村伯の北堂●跡見女學校の卒業式●貞女の眞相

●女子の英語●世の諸孃に告く

敎の庭

歌文 數十首

餘芳

みちのつと(つゞき)……小池道子

口畫 勝子……高橋松亭

挿畫 忠孝二筋道……富岡永洗

勝子



いへいかうのたゝりをとくしが
まうのたゝりをうしなひきつね
おそかれとはやかれひ
じやうけんかあしかるく
ともにきるのあくむくり
あくふくきつゆるい
こともしてのたゝまる
まのはへしておゐい
うまうのたゝりをらめん
給へといふあんない

しあはせしもあらて
もしかへしうつゝの
せくことくれとも
しかもとりけんは
恵をひくへし
ゑへしくのたとき
もあれし
つゐのをはしも

白紙のこと　第八

そのほか白紙とて、白紙はいましめつかされ候
のこと、あるかてんうとりつてあるへきやうに
すまなきやうに、そのほか白紙として、あるかうしる
ひきまちすまちしちまちすまつしんていまいり
すゝしきちかなちよみつしてまいり候
あらまちさかなれと、ちようしまいれはまいあり
あゆみまいりて、出入うちあつきしまかなふ
おんてまいらせ、あきうれしまれたれんさうし候

女鑑

育兒第一の心得

婦人の、兒子を育つべき任務あることは、言ふを須たざるところなり。されば、本誌は、常に、育兒のことに就きては、特に注意するところなるが、こゝに、尤、心を用ゐべきは、兒子をして、虚僞、假飾ならしめざること是なり。大和男兒たるものは、大和男兒らしく成長せしめざるべからず。然るに、近頃の世風として、成るべく、人をして、末節細禮に陷らしめ、少しも生氣なき少年を作り出だすもの多きが如し。これ、強ち母たるものゝ罪のみにはあらずして、實に、社會一般の過なれども、母たるものゝ教養、其の家庭に於ける感化は、又、

實に、之を改良するに於いて、深く、責を負はざるべからずとす。

天ざかる夷の外つ國人は、固より、我が大日本に、生を享けたる吾人同胞の如く、しかく尊く、しかく潔良なるものにあらず。然れども、又、稍取るべきふしの一二はなきにしもあらず。又、適當に、之を導き、之を化したらんには、榮行く我が國光の餘惠に浴ひ、一二見るべきものを出だすにも至るべし。固より、彼とて、其の國、千々に別かれ、其の人種も、一にして足らず。又、同じ國、同じ種にても、世に汚隆あり、時に治亂あれば、一律に論ふべからざれども、概して、彼の文明は、下より發達したるもの、所謂、平民的のものなれば、我が大日本の如く、高尚優美の態なきは、論なしと雖、之を導き、之を矯正し、其の卑汚なるところを棄てゝ、我が大日本の高尚優美なる眞文明を以て、之を化したらん

には、又、或は、飾なく、偽なきの一長を生ずるに至るを得べきか。抑、眞率といふことは、喜ぶべきことにして、又、我が大日本の誠の道に外ならざるなり。されば、吾人日本人たるもの、其の、自、眞率を學ぶと共に、この道を以て、天下を化同するは、又、其の國光を發揚する所以にあらずや。

理學など、玄奥なる研究の、廣く行はると共に、又、日常の交際、座作進退、極めて簡易ならしめざるべからず。日本人は、精神上の發達は、遙に、彼の上に在るを以て、少年より、老成の氣多し。大日本の學生など、彼の國に在るもの、彼の國の政治家、大學者等に面しては、極めて高尚なる質問、談話を試み、彼等をして、屢、吃驚せしむるとなり。

これ、誠に、日本人俊秀の特兆にして誇るべきことなれども、若し少年の老成し

易きが如きあらんには、決して喜ぶべきことにあらず。國民の身體の、早く衰へ、精神の、早く耗し去るが如きは、大に警すべきことたり。されば、吾人は、我が國にて、理學、哲學上、深奥なる學術の行はれ、又、社會上のこと、日々、繁劇を加へ、國と、國との兵力上、富力上の競爭も、益劇しきに從ひ、一般の社交、及、家庭内の行動は、成るべく快活に、成るべく眞率にして、末節細禮を省き、少年をして、少年らしくならしめ、以て、精神の過勞を、他の一方より輔養するの道を開くべし。

此くなすには、家庭内の感化といふこと、尤、大切なれば、吾人は、この重任を、母たる人々に加へ、小兒の時よりの慣習を改めんことを希望するものなり。

論説

女子教育と婦徳との關係（三）

黒河内與四郎

第一期　大古より王朝の中頃に至る（續き）

前號に掲げたる諾冊二尊の御事蹟は、誠に、奇怪の事なるが、其の眞相は、如何なる事を云ひしにやとの疑は、茲には論辨する必要なし。兎まれ、角まれ、其の女性が、男性に先ち、女子が、男子の上に立ち出でし事が、此の不祥の原因たりしと云ふことにこそ。即、女性は、必、男性の後に從ひ、其の成すことを口に倣はざるべからずと云ふことにてありけり。されば、陽神、先に唱へ、陰神、之に和し給ひて、始めて、美しき子の生れ出でたるなれ。是、即、太古に於ける男尊女卑の、實際に行はれ居りし適證になん。惟ふに、男尊女卑の文字は、婦人に

取りては、忌まはしきことならんが、此の四文字こそ、一家の團欒をなし、社會の圓滑をなす基なれ。又、婦人の務むべきものなれ。猶、詳に言はゞ、此の四文字こそ、女性が、男性のために、敬愛思慕せられ、其の誘掖提携を受くる最大原因なれ。若、女性にして、萬事、皆、己が才智を用ゐ、男性と相競ひ、何事も、男子に後れじと、反目睚視するが如くば、男子、何よりて、敬愛思慕の情を起すべき。いかで、女性を誘掖提携する念を出だすべき。されば、男尊女卑てふ文字は、寧、女子の爲には、望ましきものにこそあれ。

そも〳〵、此の男尊女卑の道を敎へ定め給へるものは、天照大神にておはせり。大神は、當時、此の日本を支配し、我が國の政治、敎育は、悉、之を、一身に握らせ給ひ、種々の倫理、道德をも定めさせ給ひ、文敎の淵源、實に、此の御時にあ

るとなり。されば、天神の、諾冊二尊に教訓せられ給ひし語は、之を、當時の女子家庭教育法と見るべきことよこそあらめ。是、當時に於いては、女子教育の事を記載せるものなく、亦、我が國は、古來、言靈の幸ふ國とも云へる如く、言語相傳へ來りし國にて、文字と云ふものなければ、素より、教科書もなし。されば、修身の如きも、皆、之を、口にて教へたるのみなりき。

さて、又、我が國の太古は、一夫多妻の風俗なりしかども、婦人は、怨まず、妬まず、如何にも貞實にてありたりしことは、前號に掲げたる須勢理姫の御歌にて知るを得べし。斯くて、八千矛神は、此の御歌を、哀れと感じ給ひて、出立を思ひ止まり給ひぬと云ふ。後、中古の世に至り、在原業平の妻は、已が夫の、他女よ迷ひ通ふをも、妬まず、怨まず、却りて、我が夫は、白波（山賊を云ふ）の居るてふ立

田山をも、無事に越ゆ往き給ひて、思ふ女に逢はれよかしとて、「風ふけば沖つしらなみたつた山夜半にや君がひとり越ゆらん」との歌を詠じたりしかば、さてこそ、業平は、其の志操の、優に高きに感じ、遂に、通ひ路を止めたりけれ。須勢理姫の御事にぞ、よくも似たりける。陰の、陽に從ひ、柔の、剛に讓るは、自然の道理なり。まして、女子の性は、人を導くに適するものなれば、人の妻たるものは、眞の愛情を以て、其の良人に接し、柔順を以て、其の夫の惡を感化せしむることを務むべし。須勢理姫、並に、業平の妻は、「毎事我を立てず夫の心に從ふべし。」てふ女今川の教訓を實行し、應用し給へるものにて、柔順と、愛情とを以て、其の夫を感化し、貞道を致せる適例になん。斯くて、須勢理姫の御歌によりて、男子は公然、數婦に會ふことを常とせしも、婦人は、必、一夫に

事へて、貞操を守るを貴びしことの風儀を見るに足る。蓋、此の嫉妬の念を去りて、一夫に事ふるを以て、貞徳の主要のものと心得居りしことゝ推し測らるゝなり。而して、此の風、後までも行はれけり。さて、此の事、遠く、支那にも傳はりしと見え、かの漢書と云へる書に、倭（日本國を云ふ）は、一夫多妻の風俗なり。されど、婦人は、不淫、不妬と書きて、我が國婦人の美徳あることを褒めたりき。いでや、今の婦人達よ、之に劣るが如き擧動をな爲したまひそ。須勢理姫が、かゝる貞徳のおはしましゝことと、及、其の他の事蹟よりして、當時の女子教育法を推考するに、人の妻たるものは、嫉妬心を去り、其の夫に貞にして、之に下り從ふべしとの主意にて、徳を重んじ、才を輕んじたるものゝ如し。又、此の貞徳によりて、婦徳てふものゝ全般をも想像するに難からじ。

女子處世論（二）

三輪田眞佐子

第一　天命に從ふべし

飛鳥川のふち瀨つねならぬこそ、世の姿なれ。されど、其の常ならぬは、反りて、天地活動する所以にして、其の間に、身を處する人に、或は、危を避けて、安に就き、或は、害を去りて德に寄るなど、人生に伴ふ千差萬別の興味を知らしむる源も、亦、茲に存せん。否、世は常なき如く見ゆるも、常なかるべき理ありて爾るものにしあれば、其の常なきは、亦、常ある次第なり。見よ。水は、流るべき理ありて流るゝなり。故に、其の流るゝは常あり。花は、散るべき理ありて散るなり。故に、其の散るは常あるぞかし。

人間の榮枯盛衰も、常なきものゝ如く思はるべけれど、深く考ふれば、榮ゆべき原因ありて榮え、衰ふべき由來ありて衰ふるものなり。古ぶみに傳ふ、積善の家に、餘慶あり、積惡の家に、餘殃ありと、此の意義ならん乎。故に、女子たるもの、自、賢明の心なくして、子孫の非凡ならむことを願ひ、未、家政を主る智量なくして、一家團欒の樂をなさんことを望むは、木によりて、魚を求むる類なり。されど、苟、世に、身を處し、幸福を得んとならば、必、僥倖を期すべからず。水に入るものは溺れ、火に投ずるものは燒かれむ。小町の末路、祇王の晩年、決して、偶然にはあらざりけらし。

斯く、人は、善因には善報あり、惡因には惡果あるは、固より、天命なれども、思を焦し、身を勞するなど、人事を盡くしゝも、猶、顏淵の、短命にして死にた

りし如き不幸は、浮世に免れ難きものと言はざるを得ず。常盤御前の處世、實に憐むべき事情多かりけん。思ふに、天命は、順數にまれ、變數にまれ、人力を以て更ふべきものにあらざれば、必、順奉せざるべからず。孟子曰、莫レ非レ命也。順受二其正一。と、信に、人は、天命を守るこそ、安心の道なれ。

されば、女子は、女子の學ぶべき學事を修めざるべからず。然らざれば、天命を悟るに由なきを以て、幸福を得ること難からむ。即、女子たる心を以て、女子たる道を踏み、女子たる行をなさば、必、天命吉なるべし。蓋、斯く、人事を盡くすものは、一朝、不幸に逢ふとも、其の心中ばかりは、大に安かるべし。故に、世に、身を、安樂に處せんと欲する女子は、徒に、安樂といふ結果をのみ希望せずして、安樂の源因たる人事を盡くし、天命を待つといふことに着意すべし。古

歌に、「心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神やまもらむ」とあり。心して讀め。

是に由りて、之を觀れば、女子は、其の本性に從ひて活動すべき天命を受くるのみならず、其の國情に合ひ、其の慣習に和すべきも、亦、天命なり。然るに、近來の女子は、西洋に傚たりけん、女尊男卑とも言ふべき不遜の俗を歡び、或は、男女同權論とて、兩性の自然分業を廢せんと企つるものさへあり。是、神州の國情、及、慣習に悖ること甚しきものあり。果して然らば、斯くの如き觀念を有せる女子は、あはれ、輿論に容れられざれば、勢、天に跼り、地に蹐する姿にて、世を渡らざるを得ず。豈、不幸の至ならずや。故に、不幸を避けんと願ふ女子は、天命に違ふべからず。猶、女子要言の、幸福なる生活といふ一節を參照すべ

し。

史談

勝子

鹽井雨江

垣の袂、軒のつま、たが宿にも、あらましきは、松の常葉なり。梅の花なり。櫻の花なり。松の常葉、吹く風も、なよ〳〵と、ものやさしき春の曉、きのふけふ、あらたなる日かげには、いふも更なり。青海原の潮も沸き立ちて、あら磯なみも沸きかへり、八重なす尾の上の、あら岩も燒けぬばかり、谷の草木も蒸すといふ夏の日蔭にも、綠の色は弱りもせず、衰へもせず。山の紅葉、野邊の千草、千草は千種にうつろひ、紅葉は、百木木にそむといふ秋の天にも、綠の色は、露ばかり變へず、移さず。草は枯れ、葉は散り、野も山も、靡かぬいろはなしといふ冬の木枯、霜夜の風、いやまし寒く、いやましすさぶ毎に、さすがに、やつれはすれど、しかすがに、綠といふ色は、遂に變へず移つさず。常葉の操、思へば、つきる時もなきあ

はれは、松の色なり。梅もまたあはれはおなじ、木梢の袖に袂に降り積る深雪を、苦しとも思はぬけぶり、いつしかど、重げなる雪の袂を掻き拂ひて、はゝ笑みたる、捨てがたうあはれなり。まして、花の姿の清げに優しげに、薫りの涼しくけうらなる、げに思へど、袖にあまりてゆかしきは、梅の花あり。櫻もまたあはれはおなじ、花の色の、つややかに又しどやかなる。花の容の直なほに又あでなる、柔さしくあはれなり。ましてや、咲く時の、はなやかにうつくしく、散る時の、潔く美つくしき、思へど花の中の花なり。上もなくうつくしきは、櫻の花なり。

げに、松のみどり、梅の薫り、櫻の色、この三種だにあらど、庭の掟は事足れり。この花、この木だにあらど、軒のつま、垣の袖、たが宿も、あはれならむ。また思へど、この緑り、この薫り、この色、一つ木ずゑに見たらむには、あはれはいかならむ。松の緑に、櫻の美くしき花咲きて、梅の薫りのかをりたらむには、あはれは上もなかなむ。されど、世の中には、草木は、さはにあれど、さらむ者はあらじな。夫れは、心なき花、いふ方もなき草木なれど、心ある世の中の人には、稀になむ、松のごと移らぬ心、櫻のごと美くしき心、梅のごと清きかをりもちたらむ人もある

なる。此處に云はむと思ふ勝子といふも、此の稀なる人のきはになむありける。櫻の花の美くしく、潔き姿あり。梅の花の清く床かしき薫りもあり。松のみどりの、操うつさぬ心もありけり。限りなきあはれ、上もなくあはれの人なりけり。勝子といふは、山城の國、京都のわたりに生れたる人とはきけど、いかなる人の子なるらむ、父は何と云ひけむ、母は何と呼びけむ、きこえず。飽かず口惜しく、殘り惜しけれど、いかにせむ、もの丶本にも、記したるものあらねど、絶えて知るよしあらじ。世の中に知りたらむ人もあらば、敎へてむ。きかまほしけれ。尾張の國、岩倉城といふ城の主なりける織田信行といふ人に仕へて、侍の女の童となりてありけり。心も姿も、梅のごと櫻のごと松のごと、上もなくあはれのものなりけれど、信行もまた、此上なくかなしくいとほしき者に思ひ、柔しくあはれに心を添へて召仕ひけり。勝子もまた、わが君のみさしづはかしこし、わが君のみ命は尊しとばかり思ひて、いよ〱謹み謹みて、かしづきの業に勉めたりけり。おなじ信行公の近臣に、津田八彌といふ若者ありけり。もとは岩倉の邊りの、あやしき賤の童にて、牛を逐ひ草を刈りて、人數にもあらぬきはの者なりけれど、姿容

貌は、柴がきの秋の白菊、藁屋が軒の花柳、都の人に見せまほしきかげもあり、立居振舞、おなじく鋤を取り、鍬をかき、おなじ田畑に在りても、他の童には似ず、荊棘にまじる蘭蕙、鷺にまじる鶴のごときさまあり、信行公これを見給ひて、徒らに田畑の草と枯らさむ事を惜みて、館へ呼びあげられ、近侍に召し抱へられけり。姿のみにあらず、才覺も器量も、また天の授け給ひしなりけむ、城の中なる譜代の家の子にも、なかなかに立ちまさりてありけり。

信行公は、器量といひ容姿といひ、天晴れよき者得つと、いたく悦ばれて、朝にも夕にも、ほとりを離さず、立居にも出入にも、片時、左右を離さず、八彌八彌と、寵遇、唯ならざりけり。さるからあやしき者にて、氏も族も、たしかならず、人にけ落されてありければ、信行公は、いとあはれに思はれ、姓など與へて、譜代の家の子と、おなじ列に連らね、次第に引昇げさせられ、遂には執事の地位にも昇せて、老臣などと、おなじく家の事務を取り扱はしめ、寵愛の勝子にも、行末は八彌を夫にせよ、八彌も、余が媒ちせむ時は、勝子を妻にせよと、二人にも約し給へり。門閥の上下、氏姓の尊卑を本としたる武家の世の中の事にしあれば、八彌の、いよ

ひよ時めくを、心よからず思ふ者は多かりけり。そが中にも、右府信長の方につきたる老臣に、佐久間七郎左衞門といふ者ありけるが、そが兄は、佐久間盛政といひて、信長には恩顧の武士、殊に七郎左衞門、度々の戰塲にも立ち働き、武門の功も多かりければ、常にはこり顔にのみ振舞ひ、人を人とも思はぬ威勢ありけり。かゝる者なれば、八彌ごとき氏も定まらず、門もあらぬ百姓ずれの子と共に、おなじ一列に立ち並び、おなじ地位に肩を並ぶる事を、潔ぎよからず、無念口惜しく、恥辱とばかり思ひけり。常に八彌を、百姓武士とぞかり、忌み嫌ひて、折りふしは、わざけりのゝしる事もありしかど、何時、八彌の才論に云ひふせられ、八彌を恥かしめむとして、反りて人中に、恥を受くる事ありければ、ますく八彌を憎き者に思ふ怨みは、骨髓に徹しぬ。八彌を刺しては、其の意恨はえ止まらずとまで思ひ、忍びて討ち入りて殺さむと、密に用意を爲したるところあさましけれ。

八彌も、何處より如何にしてか知りけむ、佐久間の企を知りてけり。いかで、やみやみ討るものか、彼れ來なば、逆よせにして叺れむと、此方も又密に用意して待ちけり、佐久間は、斯くときゝて、敵にさる用意ありては、無謀の業にては、敵の備

中に陥つるならむと、一度は思ひ止まりたる如くしけり。偖て、とやして殺さむ、かくして討むと、さま／＼思案を凝らし、遂によからぬ者に頼み、風いと凄じく吹きあれたる夜、八彌が屋敷よ、火をかけてけり。火と打ちきゝて。八彌は、すは大事なり、何として火は出でけむと、思はず表へ馳せ出でしにそ、我家、我君、我世の別れなりけり。

八彌が屋敷は、わへなく烟りとなりぬ。八彌は、無慘、亡骸のみなりけり。信行公は、斯くと聴き給ひて、慈きもせられ、また恚りもせられ、焼きたる屋敷も家も、更に惜しからじ。八彌をかりは、いとをし。わはれの最期は遂げたるもの哉。思へぞ憎き白者のいたづらかな。わが寵愛の重臣、何の恨み有りて、誰か殺したか。疾く／＼詮議せよ。われ自ら手討にして呉れむと、いきまき給ひけり。

八彌の死骸のほとりに、一振りの短刀落ちてありけり。信行公は、疾く／＼と、受取りて見給へバ、正宗といふ銘ありて、目貫には、金もて龍を彫みてありけり。信行公は、うちかへし／＼見て、此の短刀、何となう覺えありと、つく／＼と考へ給ふに、思ひわたりしは、これぞ先つ年、信長より盛政に賜ひしものなる、この短刀わ

るからは、八彌を殺したるは、盛政のゆかりの者にあらむと思ひたれど、正しく誰の業なりと、慥しかなる証しもあらねバ、強ちに責むべきやうもあらず、泣く泣くも遺骸を納めさせ、暫時無念を押さへてありけり。

怪しむべきは、七郎左衛門なり。八彌が果てゝより、病と稱へて、御殿へも出勤せず。信行公も、七郎左衛門と、八彌の間の、よからぬ事は、常に知りてあれバ、必定、七郎こそ、刄傷したるものならめと、ますます忍び忍びに詮議を盡くして、町邸々、殘りなく探させけれど、あやしき賊出でたり。捕へて嚴しく問へバ、八彌の屋敷に、火かけたるは、此の賊にて、佐久間の殿に頼まれてなりと、殘りなく白狀したりけり。偖て、思ひし如く七郎なりしか、憎き業はしてける奴かな。疾く呼ひ出でゝ、私の意恨故に、君の股肱を斬りたらむ不忠の罪を正せよと、下知したりけるが、七郎は、いつしか家を捨てゝ、美濃に逃れ、齋藤道三に、身を寄せて、在らずなりけり。

信行公は、ぬかりたりと、疊を踏み鳴らして恚りたまへど、覆水のかへるべきやうなく、かてゝあはれなるは、勝子なりけり。八彌のあへなくなりしと聽し時は、あ

が人は、今朝まで在りしものを。いかで、亡からむと、え思はむ。さりとも、偽りども聴迷ひつ。形身の髻肌衣、送り來されても、なほ、さりとも夢ならむと思ひ迷ひ、まとひて見れば、君も無念にむせび給ひつ、勝や、泣なせそとのみ言葉、奥方も泣き沈みておはすが、勝や、いかに悲しからむと撫で給ふ御手、彼れも是れも、夢にはあらじ。夢ならじと思ひて、取りし髻肌衣、つくづくと打まもれど、これを在りし世の姿とは、現には思はれず。またつくづくと打まもれど、髻も肌衣も、正しく手に在りて、影は消えず、消えねど夢ならじ。夢ならずど、これぞ現なりや。さりとも現とはゑ思はじ。現と思ふが夢ならむと、瞼を掃ひても、髻肌衣はゑ消えず、偖は、遂に夢ならじ、現なりと思ひてか、髻肌衣を抱きしめたるまゝ、よゝとむかり泣き去づみたり。

夫れより、五日六日は、ものも覺えぬけしきにて、現の日には、夢のごと思ひ暮し、夢の夜には、現のごと、おもひあかしてありけるが、何を思ひ定めけむ、また泣かず、涙あらず。唯、信行にうち向ひて、只管に、身の暇を求めけり。信行は、八彌の仇を探らむと、思ふなる勝子の心は知りたり。されど、心はいかに金石なり

とて、かよわき女子、今更に、一人浮世の雨風に晒さむ事は、忍ぶ方なし。われも、いとはしき八彌の仇、いかでかへさでやまむ。余に任せよとのみ仰せて、止めてありけるが、仇は七郎といふ事、定りたるに、空しく捕らずなりて、七郎、身を美濃に隠したりと聴きて、勝子は今はかくと思ひ定め、信行の御前にかしこまりて、わが君のみ心に、露ばかりとて叛き奉るは、日來の志にも戻りて、口惜く無念には侍べれど、夫の無念をも聴きながら、安すけき床に起臥して、事なげに知らぬさまに、徒らに過ぐるやうありて、心なき妻となり侍らむ、わが君の年月の、おん敎にも戾りて、なか／＼に、おし側を去り以べるにも、増て不忠とや成り侍らむ。よしや一つ宿、一つ床、互につまはがたしきは侍らねど、わが君の仰せ侍りしより、わが心には、八彌の主、わが君のおんたまもの、わがよ、わが夫と、思ひてのみありけり。さるに、其の人の無念、よそにすぐし侍りては、わが君のおん心をも、わが夫の心をも、輕々しく思ふに似て、君に仕へ、夫に嫁ぎて、この勝の道立ず。まかのみならず、わが君の御領内に、仇のあらむ程は、わが君の御心一つにも、ならせ侍れど、いま其の者は、齋藤氏の御屋敷へ隠れしとありては、君のみ手もて、取りかへさせ

論はむといふ事は、事大事に成りて、なか〱に難義にや侍らむ。妾が一人にて、爭
美濃へ參り、兎も角も、思ふども、仇をかへさば、齋藤氏は、必ず患らせられむ。患
らせられしとて、妾一人の罪のみ。わが君の御心を煩はせ奉るやうの事侍らじ。よ
しや事ならで、むなしくなり侍らむやうの事ありとて、又、わが君の御恥辱にも成
り侍らじ。勝といふ者が、よしなき事してと、いはれむのみ。のう、わが君。何れに
侍べるとも、妾が夫ゆゑの事に侍べり。妾が夫ゆゑに、君にまで、御心を煩はせ奉
るやうの事あらば、いつか亡き夫に遇ひ侍らむ時、亡き夫や、必ず恨み候はむ。妾
も面ぶせに侍べり。勝といふ者なかりけりと思し召して、暇給はれと、思ひ定めて、
ひれふしたりけり。
信行公も、日來より、勝子の心は知りてけり。汝が行かむといふを、今日まで留め
たりしも、汝に辛かれとのみ思ふにあらず。汝が事を思ふの餘りのみ。汝を一人や
らむ、心元なさの止み難たければなり。さばかりの覺悟あれば、余も殘すべき未練
かは。よしなき事思ひて、今更に止めては、汝が蹈むべき道を、妨ぐるに似たれば、
今はゆけ。事ならむまでは、わが事な思ひそ。又ならば、又余が方にも歸り來よ。

さはいへ、汝が力に餘る事あらむには、余に告げよ。汝が爲め、八彌の爲め、余も惜しむべき力かは。汝が夫の討れたる此の短刀、此の短刀にて、汝が夫の恨みを返せよと仰せて、ありける短刀を授けられ、花々しく歸らむ日までの形身とて、門出の宴さへ、花々しく振舞ひてけり。

夫れより、勝子は信行公の勸むるまゝ、老僕を一人引きつれ、幸ひ美濃の稻葉山の麓に、叔父なる人の住むありければ、之を尋ねて、暫時ときをも待ちてけり。さるに、道三の子龍興といふ者、鷹狩りに出で、はからずも、勝子をかひまみて、姿容貌の世に勝れたるに、捨てがたう思ひけり。かゝる野末に、置かむ事を、あはれのものに思ひ、母に物語り、母の侍きに召さむ事をいひ出でけり。勝子は、稻葉の城中に行かむ事は、望む所なれど、悦びて、召しに應じて、道三の妻の侍きとなりけり。

勝子は、姿も心も、櫻のごとく、又梅のごとく、又松のごとき女子なりければ、誰がはあはれと思はざらむ。道三の妻も、又こよなく、あはれの者に思ひて、何事にまれ、勝子〳〵といひて、いねるにも、はとり近う、ふしどを許し、勝子の心地勝

れて、一日二日籠りてあれど、おのれもものの淋しげに、心地もすぐれぬけしきにて、幾度となく、女の貌も、問はせ給ふ程になりけり。

思ふ事なく、はかなき宮仕ならむには、上も無き身の幸福、幾歳もかくてと思はむが誠ならむ。過ぎゆく月日、惜しむもなからむ。積もる月日、心にもとめずやあらむ、されど、亡き夫の恨みを、晴らさむと思ふ心は、射る矢のごとし。思ふ事は、矢も楯も堪へぬ大望ある宮仕、稻葉山の一刻は、世の中の千秋より長く思ふに、一年は徒らに過ぎ、誰が爲めの春ならむ、立ちかへりたる春、霞はたちぬ、花は咲きぬ、世ははなやぎ、人は浮き立ちぬ。されど、咲かで散りたる花妻の歸へるすべなけれど、勝子の心には、花もあらず、春も歸へらす、冬の夜の、思ひ氷はりてのみありけり。

彌生となれど、野邊も山邊も、花咲き滿ちて、のぼらぬ雲、靡かぬ霞と見え、稻葉の城も、花の中に埋れぬ。花見の宴をかねて、騎射の遊びを行ふ事は、年毎の例とて、馬場には桟敷わたして、奥の女子どもゝ、物見を許す事なれば、勝子は、心の中に悦びて、その日の番組なりと云ふを見るに、第十五番に、佐久間七郎左衛門、

げに憎しと片時も忘るゝ刻なき七郎左衛門の名ありけり。勝子の悦びは、如何ばかりなりけむ。心に、齋戒沐浴して、必ず此の日をと、神に祈り、夫を呼びて、待ちたりしが、誰れとて知る人はなかりけり。

設けの日となりけり。勝子は、事成るも成らぬも、けふや限りとならむと思へば、尾張の方を伏し拜みて、遙に信行夫婦よ、今生の暇を告げ、また道三夫婦にも、何となう別れを告げ、傍輩の女子などに、調度を分ちなどしたれど、日來より心やさしき勝子の事なれば、誰れとて怪しむ者なかりけり。勝子も、なに心なげに、人々と共に、設けの棧敷につき、一番二番と、勝負のまも、唯七郎の早く出でよとぞかり、眺めしが、軈て十四番の勝負も果て、第十五番と爲りぬ。佐久間七郎左工門と名乘る聲を聽くと共に、勝子は、棧敷の簾を、さつと搔き拂ひて、ひらりと踊り出でたる勢ひ、嵐の木の葉を誘ふかごと、人々のあれと思ひし時は、はや七郎左衛門にはしりより、用意したる短刀持て、七郎の横腹、またたかに指し貫き、津田八彌の妻勝、唯今、亡夫の恨みを晴らしたりと呼びけれど、聲の響きに答へたらむとかり、邊りの櫻の、はら〳〵と、勝子の袖に散りかゝりたる事、知らぬ見物も、思は

すぐつと打はやせど、山の嵐の折り節し、ぐつと櫻を散らしたるも、花々しかりしと云ふ。

仇とはいへ、七郎は織田家の老臣なり。道三ありながら、一女子に討せしとありては、信長の思はむ事も、如何ならむ、志は勇ましけれど、容るすべき者にあらじと。厳しく下知して、囚屋の中に繋ぎたり。勝子も、露ばかり臆せず、一生の望みも、今日遂げ、一生の恨みも、今日晴らしたり。今は思ひ殘す事は、絶えてあらじ、早々おん仕置にぞ願はしう侍れといひて、眼を閉ぢて、又物もいはざりけり。道三の妻は、さばかり最愛の勝子なれば、斯くと聴くより、悲しみは、わが子にも優れり。いづれ亡き命ときくに、いよいよ悲しうなり、道三に歎げきて、勝子の今世にあらむ中に、今一眼名殘りも、とゞめたく侍べれば、一日わが邊りに置かせ給ひてと、頻りに乞ひければ、道三も、さまで憎くもあらぬ勝子なれば、妻の乞ふまゝ許しぬ。夫人は、勝子を見れど、いよいよ哀れに、悲しうなり、是非に助けまほしうなりぬ。余れ許さむに、何處なりと、落ち延び、兎にも角くにもして、命ばかりは、存命へよ。汝を見てし日より、何となう、わが子のやう思ひて、悲しがりたる汝を、如何

でむざ〳〵と殺して、此の世に在る心地せむ。後よな心おきそ。疾く〳〵と促し給ひけり。勝子は、ひれ伏して、頭もえもたげず、此の一年あまり、海山も數ならぬおん情にあづかりつゝ、露ばかりも恩にかへし奉る事せず、私の意恨を、けふまで隱し奉り、君をも欺き奉り、御家をも騒がし奉りし事は、この身、八ッ裂きにさき侍りても、謝くすべき罪には侍らじ。今、また、罪ある身を逃れむと、よしなき業し侍りて、君に難義を懸け奉る事しては、いよ〳〵罪を重ね侍べるのみ。數ならぬ身には侍べれど、心は潔くとばかり、日來よりの望みに侍べれば、唯、憎きものとばかり、思し召して、今生のおん暇、曲げて許させ給へとかしこめば、夫人は、いつかな聽き入れず、汝は罪ありと云へど、正しく女子の道を蹈みたるもの、道より云はゞ、なか〳〵に、譽めもたたへむ者なるを、空しく情なく、散らしては、心ある人は、何と云はなむ。齋藤道三が、殊更に逃しゝとありては、隣國のよしみも如何ならむ。女子がよしなき、未練より、過ちしとあらむ、信長公も、何とかあらだち給はむ。やよ、勝子。事は兎まれ角まれ、わが逃れよと教ゆるを、強て果てむといふは、わが情を知りたる心とや云ふべき、齋藤の家の者を、世の中の人の、も

の笑ひにせむとや思ひてかと、説きて見つ、恚りて見つ、わりなくすゝめ給ふに、勝子も、今は爭はむやうもあらず、唯々とむかり、嬉し涙に掻き昊れて、承はれば、夫人は、いと嬉しげに、能くこそ聽つれ。汝をよかれと思ふが故のみ。惡しくな思ひそ。さるにても、いかなるえにしにやあらむ、わが子にも別るゝが如き心地すとて、おん膝に引き寄せて、屢時は涙に昊れ給ひしか、黄金の一袋取り出でゝ、手づから勝子の腰に結ばせられ、はや／＼落ちよ、返す／＼心せよとて、催し立て、何處の浦なれ、いかなる山なれ、落ち着きもせば、雁の行き歸りに、天にも便りを知らせよ、春秋を樂しみて、待ちつといへば、勝子は、何と返さむ言葉もあらず、唯、二度三度ふりかへりて、伏し拜みて、立ち出でけり。

勝子は、何處を指して行かむ天も覺えず、さすがに心細く思ひしが、岡崎に大須賀康高といひてゆかりの人ありければ、そこを尋ねて、身の上を語りければ、康高、あはれに思ひ、家康に旨を告げゝれば、家康も、けなげの者や、われが方に來れよ、われ必ず助けえさせむとて、岡崎の城に圍ひ給へり。佐久間盛政は、弟七郎を討れしと聽き、弟の罪は思はず、唯弟を口惜しく思ひ、信長よ歎きて、是非に勝子を、家

康より乞ひ取りて、弟の仇かへさまほしゝと、歎ききこえけり。信長公も、老臣の歎願、捨てもおかせず、池田信輝といふを使として、岡崎に至り、家康に勝子を渡さむ事を乞ひければ、切角わが懐を頼みたる窮鳥、捨つるは、弓取りの心にあらじといはて、家康は、更にきかざりけり。

盛政は、ます〳〵恚りて、遂に刺客を遣りて、勝子を刺さむとしけるが、事ならで刺客は、やみ〳〵捕へられ、しか〳〵と白狀しければ、家康は憎き奴よと、直に討首にせられ、岡崎の辻に、梟首に懸けられ、殊更に側に札を建て、佐久間盛政に頼まれて、勝子を刺さむと、刺客に來せしよしいへど、さる事のあるべきやうあらず、偽り申す者ならむと思へど、梟首するものなりと、記るされければ、盛政は、ますます恚り、信長もいたくけしき惡しく見えて、家康か去る片意地なる事爲すとあらば、兵馬にかけて、岡崎を蹂躪しても、此方の存分、晴らし吳れむと、いきまき給へり。家康も今更弓矢の道はかへさじ、兵馬をおくり給ふとあらば、われも小勢ながら、迎へ申さむと、いひ返へしたり。言葉にも、はしなく火花を散りたれど、武士の意氣志は、互に烈しくなり、あはや尾張參河、修羅の巷にならむとせり。

勝子は、かくときくより、身もよもあらず、悲しうおもひぬ。妾ゆゑに、よしなき軍起りて、民の竈に、血をあやすやうの事ありては、上は九重にましますす大君に對しても、畏くも恐れ多かる事なり。下は、よしなき戰故に、をなじ民草の、いくそむくその歎きを、かけむ事は、情なく罪多かる業なり。なまじやうなき命を存命へてあれむこそ、やうなき雲も迷ふなれ。妾が身、生るも死するも、唯一人の女子のみ。一人の女子ゆゑに、しかも此の世の宿意も遂げ、又要なき身ゆゑに、あたら世の中の望みある人の、幾人、歎きとならむず事は、心ある者のなす事かは。妾も、心ばかりは、人におくれじと思ふものあるをといひて、無慘なるかな、花あらし。色も香も美くしき花の小女が、われと刃に貫ぬきて、あへなく落花のうらみをとゞめけり。

あはれ勝子。君の一言に、八彌をわが夫と思ひ、かよわき身をかへりみず、敵中に忍びて、積年一日のごとく、遂に志を貫きて、貞操の道を踏みとげ、又、多かる人の難義となるときゝて、潔く散るを惜まぬ心、げに櫻なり、梅なり、松なり、あはれは上もなきものなりけり。おのれ、このごろ、烈女傳といふを讀み、又野史てふ

歯をよみて、この勝子の傳を見、措く方もなく、あはれの心地して、かくはかきとめぬ。

武林唯七が母

花山やすら

德川氏治世の間に、忠臣義士の出づるも多かれど、中にも、赤穂の四十七士ばかり著きものはなし。彼の人々の忠義は實に萬代も朽ちざりけり。さて彼の人々の中には其の親たる人の能く訓へ誡めて其の行を成さしめたるもあり。中に就て原宗右衛門が母の如き、武林唯七が母の如きは、我身命を棄てゝ其の子を誡めしは世に稀なる行と云ふべし、而して原宗右衛門の母の事は先きに貴誌に載せられたれど、今は、此の武林氏の事を揭げまほしうてなん。

武林唯七の母は播州赤穂の城主淺野長矩公の乳母に召されし女なるが、御馴染め最深かりけり。長矩公は曾て幕府の命にて、天使の接伴を勤められしに、殿中にて吉良上野介を刄傷に及ばれしかば、御咎ありて、切腹を仰付けられ、其の遺骸を家臣礒貝十郎左衛門外二名にて請取り、輿にて屋敷に歸り、奥の間へ舁き入れけれど、北

の方を始め、局上臈腰女に至る迄皆々悲み傷みける。殊に、唯七が母の悲みは一層に哀なり。斯くて、公の遺骸は高輪泉岳寺に葬りてけり。唯七が母は、其の痛みに堪へず、家にかへり、唯七を呼び近づけ、涙を押拭て云ふ様、我が殿様の御無念を推し計り奉れば、如何にもして敵を討ち取り、御墓へ備へ奉り度願は胸に塞れども、如何せんかよわき女の身にては、力及ばず、實に無念の至なり。汝志あらば謀を廻らし、君の御敵を一太刀なりとも恨み參らせ、君の御憤りを晴らしてよ、假にも弓矢の家に生れては君の爲め忠孝を存すれば、命は羽毛に比するとも尚輕かるべし。戰に臨みて敵と死を爭ふも、君の爲に義を守りて命を致すも理に於いては同じかるべし、早く一命を抛ちて多年の厚恩に報ひ奉るべしと、打潤れて誡めける。夜もいたく更けたりけれど、直に奥の一間に入りにけり。唯七も其の説諭に感激して寢に付ぬ。老母は、獨り思ひ出づることあり、我此の命を存へても子孫を永く愛すべき身にあらず、さらば、死して子の義を勵むるこそ、妾の本意なれと、守刀を抜き放ち、胸元に突立て、遂に敢なく失せにけり。實に女なれども義を重んじて命を棄て、名を辱しめざりしは、武士の母たるに愧ぢずとぞいふべき。その物音に唯七は驚起ちて見れば、

無慘や、母は、短刀にて咽元深く突貫き、早てと絶えにけれど、悲痛の涙に咽び、只悄然として居たりける。斯くて在るべき事にあらねど、葬送の事ども取り行ひけり。斯くて後、唯七は、亡母の訓誡を思ひ、亡君の遺志を果たして、以て、君の御靈をも母の靈慰めんと心を金鐵の如くし、遂に大石國老等と謀ことを合せ本望を遂けたりけり。是、唯七の天性忠孝の心厚きによると雖、亦其の母の死を以て之を勵まし勸めたりしによれるものといはざらめやは、あはれ、此の母ありて此の子あり、此の子ありて、此の母の名も朽ちざるになん。

家政

看護法捷徑（三十六）

三笠舍主人

第四編　常に多き病の心得方（つゞき）

（十三）疥癬

一疥癬は、重に指間、腕關節、肘關節、の前面、腋窩、臍圍、又は膝膕、等に發す

る皮疹にして、其因は、一種の小蟲、表皮の下に棲息するに依て發するものなり、此虫を疥癬虫と云。

二　疥癬は、人身の皮膚の軟弱なる部、則、直に上に掲げたる部の、表皮の下に占居するものにて、其儘、恰表皮の下に、隧道を穿ちて、其中に棲息し、次第に近邊に向て繁殖し、又疹より出る液汁と共に、他の健康なる皮膚に附着して、更に此に占居す、此くして、身體の全部に蔓延する事有。此蟲の棲息する處は、皆皮疹を生ず。

三　疥癬の主なる症徴は、煩痒甚しく、特に其部温るか、又は夜間臥蓐に就く時は、煩痒著るく増して、忍び難く、患者頻に、爪にて搔を以て、液汁滲出し、皮膚の處々に搔痕を生ず、病氣進む時は、皮疹變して、小膿疱と爲り、或は數多の膿泡溶合して、不正の大なる膿泡を形るに至る。

四　疥癬は、甚だ傳染し易き病にして其傳染は、疥癬虫の傳搬するに因る、則、直に病者の身体、又は皮疹より出る液汁に觸るゝより來り、其他、總て患者の使用せる、被服、器具、等の媒介によりて、傳搬す。

五 故に疥癬患者ある時は、之に觸接すべからざるは勿論、必用無れど、其室内に成るべく他人を立入らしめず、又被服、器具、等一切他の健康人と、混用せしむべからず。

六 疥癬を治するには、疥癬虫を全く殺し盡すを要す、其法は、醫の敎を請ふべし。通常、「ペーリユーバルサム」(藥名)を擦劑として、患部の皮膚に擦入(方法前編に出づ)して、温保し、翌朝に至り、石鹼にて、患部は勿論、全身を洗ふ、毎日繼けて、此法を反覆し行ふ時は、終に全く殺虫し得るに至る、但、僅かの部と雖、擦入及ばぬ處ありて、虫窩を遺す時は、他の部は癒るも、再び此遺りの部より繁息して、再發す、故に擦入は、極めて密にして、十分なるを要す、其他、殺虫藥として、昇汞水、硫灰水、等を用ゆ、全身に蔓延したるものは、擦入のみにては、至らぬ事あり、兼て藥湯に浴せしむるを良とす、

七 疥癬患者に用ゐし、衣服、寢具は、十分に消毒法を行ふ後に非ざれば、再用すべからず、其法は、熱氣消毒法、又は藥液消毒法、(共に前編に見ゆ)を施して、十分日光に曬すべし。其他、患者に用ゐし、器具等も、一回消毒の後に非ざれば、妄

り他に用ゐるべからず。

附記

本編掲ぐる處の各病と、前編（第四編）擧る處の各症とは、共に日常多き疾病とす。其異る處は、前編に掲るものは、總て一時救急の所置を用する症なれども、本編に掲るものは、別に救急の所置を要せざるにあり、尤、發病當時の取扱は、同じく肝要なれども、前者の如く、最初救急の處置、主と爲るものには非らず。又、傳染病（疥癬は、普通の傳染病とは、類異れり、）は、別に部門を設く。

漫錄

あうむ文學　楢の舍主人

わが冬

都を去る四五里、山ぎはの村に、わが家居あらしめよ。富士の高さは、望ましからず。さりとて、又、名のみこと〴〵しき摺鉢山も、ねがはしからず。大臣富豪、さては紳士の別莊なんどは、掛巻もかしこし。柴かる杣人、牛ひく百姓があむら屋は、もとより好ましからず。籬の内軒のまはり、

花の木、植ゑ生じて、春ともいはず、夏とも限らず、秋ともいはず、笑顔あてやかに、香氣うるはしう咲き匂はせむはもとよりなり。されど、花にまよふ春、風待つ夏、月見る秋なむどの陽氣を、戀ひ焦るゝものかは。冬の日の嚴格なるは、わが最あらまほしかる時にて、なべての幸福も、實にこれよりぞ得らるべき。さるに、つら〳〵世のさまを觀るに、大かたは之をおぼろかに見過して、少しも心おかぬやうなるは、誠に怪しむべきことかな。いな〳〵、こを迎ふるには、いかで去年よりものどけかれかし。こを送るには、疫神惡鬼など追ひやらひたる面もちにて、御芽出度いはぬ計なるは、そも何の故にかあらむ。わが冬に於けるは、全くこれに異なり。年々、われ、天地八百萬の神に祈りつらく、この冬も、霜雪あられなど、いたく降らせたまへ。あらしさへ劇しうたち交らしめたまへ、と幣帛たてまつること無きにしもあらず。

障子しめきりたる中に、膝も埋もるばかりの敷物うち敷きて、桐火桶さしかゝへ、にえ湯の音いさぎよきに、木の芽うちかをらし、燈火うちかゝげて、古今の偉人に交り、東西の雅客と物語なんどする、愉快いふばかりなし。さるに、外面には、雨風いとすさまじくて、互にまけじ劣らじ、と吶の聲いかめしう、入り亂れ爭ふに、あはれ天地も崩れざらむやは。休戰の旗あげぬるにか、勝負つきぬるにか、そよとだに聞えずなりぬるに、窓の戸さと押せば、心も深き雪の降れるなりける。こ

れなむ、寒氣にのみ熟する果實にはありける。
雪、いたく積れかし。霜、しげくおけかし。或は又、風よ、わが背よせかくる柱とも吹けかし。或は又雨、瀧川の勇ましく降れかし。薪も炭も、ただ嚴冬のためにとて、いたく消費するものぞ。まして、何呉の費用も、みなこれ冬を買はむためならじやは。函館札幌はいはず。獅子うら靡く魯西亞までも、冬の間こそ行きて住まはまほしけれ。人生、いたづらに快樂を貪るためならむか。然なりし〱。冬のためには、われ決して否むこと能はず。　畝火山、仰ぐも高き御代の紀の日もうち過ぎては、快く冬夜を味ふこと能はず。暗夜の障屏を築きて、遊糸のもれいづるをたち防がばやな。
されば、霜月二十日ごろよりぞ、わが年々幸福の時期にはありける。およそ最幸福の日はいつ、如何にして、何れの處にて得しかと取り出でゝいはむことは、いみじき人たりとも、到底なしあたはざる所なるべし。若あらば、千里を遠しとせず、訪ひて其のいふところを聞かむ。されど、數年或は數月うちつゞきたるは、容易に斷言し得べし。
わがこの時期は、茶器と共にわが居室に入り來る。茶や、神經あらきものに嘲らるとも、その補精藥たるを知らざる者に疎まるとも、有情者には常に愛賞せらる。汝を嘲る者、汝を罵るものあらば、われ三軍を叱咤するの勇を奮ひ、同志と共に汝を攻擊する敵勢にむかひ、敢て決死を辭せざるべし。
さて今、紀事の勢をさけむがため、畫工を擁し來たり、彼をしてわがいふまゝに、冬夜のありさま

を揮毫せしめむとす。

まづわがために、十疊の一室を描け、これ知人と談論して、かつ飲みかつ食ふの席となし、且わが居室に充てむとの欲望なれど、むしろ之を書齋と呼むこそ、頗るの宜きには稱ふべけれ。これその七珍萬寳の貯なきも、備忘筆記のくさ〴〵は、大厦高樓の人々よりも、反つて富饒なるべきによろ。これら寳物を描くためには、最心を用ひよ。ゆめ〳〵輕忽になすべからず。床の間には、わが師が敬神尊皇盡忠報國の語の長歌、その前には、大黒天の御像を安置し奉り、その左には、獅子形の香合を配し、火桶には湯氣たちのぼる鐵瓶。その他、學生にふさはしきほどの家具。火の側には、茶盆すゑ、その上には、萬古燒六つばかりのせよ。あらず。かほどに荒るゝ夜は、何人か訪ひ來べき、たゞ二つにてこと足るべし。獨して、木の芽もてはやさむは更に興なければ、またうら若き少女子の、霞のひまのかば櫻といひけむ同じく名だたる式部の面かげしたる、なほつま定まらぬを描け。されど、昔は知らず。今はさる類まれなる天女降臨せじとならば、清少納言か玉蘭女史を。もしは、汝が理想をもて、如何にともなせ。但、楊貴妃衣通姫の流は、たとひ人間のたねならずとも、わが撰ぶところにあらず。いな〳〵さる少女子にかしづかせむは、わが今の境遇には全くあるまじきに、思はずも汝を煩はしてけるかな。さて、わが像即主人公たるわれを前景に、机により英書繙ける、しかも指頭はうゑぶすたー大字書かい

探れるところを描け。これ、決して汝を欺くとにもあらず。又汝に誇らむとにもあらず。われ常に眼を英文にさらせりと雖も、修學なほ日淺うして、いまだその眞味を咀嚼する能はず。一行を讀むにも、必その字書の助を借り、一節を過ぐるには、必數度その嚮導に依賴す。況や一枚一巻を讀み了るに、その助力を乞ふ、果して幾百度幾千萬度なるを知らず。されど、幸にして文明に遭遇し、深く自感ずるところあり。諸學の王にして快樂の淵源たる、東西の文學をたづねて、いはゆる眞の幸福を得むとするに切なり。されバ、かねて未來の欲望をも机邊にあらはれしめよ。何ぞや。羅典希臘の古文をはじめ、その他二三の國語書ぞ、わが遂にはおし究めまほしきものにはありける。わが容顔をうつす、願くは、羅生門に人をなやましけむ恐ろしきものとなすなかれ。又、幾多の人をおもひの淵に沈ませけむ、在五中將ともなすなかれ。たゞ時に汝に屬す。冬夜の幸福をたのしみ、古人と談笑して、よろこび眉間に溢るゝの狀となさむことを。

道のしをり歌合（九）

久志本常幸寄贈

わはれとて人の心のなさけあれな
　數ならぬにはよらぬなげきを
思ひいれた人も我身もよそならず
　こゝろの外のこゝろなけれた

陶淵明か、是もまた、人の子なるぞと、いひけ

る、たれも、此心して、人の子をめしつかふべし、吉川惟足が「おもへたゞつかふも人のおもひ子をわがおもふ子に思ひくらべて」と、示しけるは、さらに切なり。なべて、親の子をおもふ心は、たふときも、いやしきも、かはることなし、たゞ、運命の貧福によりて、つかひつかはるゝ身となるなれバ、いたはりをくはへ、あはれみてこそつかはめ、なさけなく苦しめなやますべきものかは。

人のおやの心もくみて志らるゝは
　やけ野のきじの子をおもふ聲

心してつゆだにかけよなでし子の
　あらき風にもたのむかきねを

京のとめといへる女房、夫の小童をつれて夜話にゆきけれバ、「わが子なら供にはやらじ夜の雪」と、くちずさみける、其角が「はつ雪やあれも人の子樽ひろひ」と、いひけるにもまさりて、いとなさけふかし。

吉野なる夏箕のかはのかはよどに
　かもぞなくなる山かげにして

風さゆるとしまが磯のむらちどり
　たちゐは浪のこゝろなりけり

よしの川は、水はやくして、鴨もすむことあたはず。たゞ、山蔭なる川淀の水のよどめる所になんあそびぬる。こは、人を容るのこゝろをたとへ示せるなるべし。としまが磯のむら千鳥は、たゞ風浪に志たがひて、たちもしゐもするごとく、女は、和順の徳を宗として、人に志た

がふ道なれど、何事も、おやをふその意にまかせて我を立まじきいましめになん。

たのめてもあだし心のおくの海の
　荒きいろべはよるふねもなし

まこも草つのぐみわたる澤邊には
　つながぬ駒もはなれざりけり

人をめしつかふは、とかくあはれみめぐみて、主従のまたしみ厚くてこそたのもしけれ。むごくなさけなくめしつかへど、情はなれてうとうとし。かくては、臣あれども臣なきがごとし、家運のうすくなりもてゆく、是よりなげかしきはなし。

身に寒くあらぬものから侘しきは
　ひとのこゝろのあらしなり鳧

思ふらんこゝろになりて見る時ぞ
　ひとの憂へも身に知られける

富貴の人、いとけなきより世のうきことをしらず。不仁のならはし性となりぬれど、物のあはれをしらざるぞわびしき。かけまくもかしこき、一條院のみかど、まつしき民のくるしみをしろしめさんとて、寒夜に御衣をぬがせ給ひて御試あり、四海の民をおもひやるに、朕ひとりあたたかなるべからずとぞ、仰られける、いかたかりあつきおほんいつくしみとやまをし奉るべき。

おのが身のおのが心にかなはぬを
　思はゞものはおもひしりなん

誰もまたわが身をつみて思ふべし

いのちはをしきものと知ずや

おのれを恕するの心をもて人を恕せよとなり。おのが身の安樂なるにまかせて、人のうへをかへりみず、物になさけの心なからんは、人の性もたるものといふべけんや。

待かせにながめし秋ははなゆゑに
いとふべしとは思はざりしを

散ればこそ今はうらむれ梅のはな
にほひしまでは風やいとひし

人のにくむべき事あるも、かならずしも一概にうとむべからず。おもひなほして其情をあはれめば、また捨られぬことわりもあるものぞかし。

春さめはいたくなふりそさくら花
まだ見ぬ人にちらまくもをし

里わかずかたらひ渡れほとゝぎす
まつらん人のおなじねざめに

人我のへだてなき心ざし、世の中は、だがひにかくあらんこそめでたかるべけれ。「たまさかに我まちえたるうぐひすの初音をあやな人やきくらん」「此里よ去むしかたらへほとゝぎす外の初音はけふならずとも」、「わきてまづ我にかたらへほとゝぎす待らん里はあまたありとも」、などよみけるごときは、いと身がちなる不仁の歌なり。おのがたのしむ所は、人にもおよぼさんと思はんこそ、まことの風雅ならめ。

龍田川もみぢみだれてながるめり
わたらばにしき中やたえなん

關の戸は雪のそらねにあけつれど
　ふまゝくをしき雪ぞふりぬる

物のうるはしきにきずつけてんことをおそるは、人の善をそこなはざる心ぞへなるべしと、ものゝへの茂卿いへり。

朝日やまみねの紅葉のさかりには
　こゝろあらなんうぢの川ぎり

散あへぬと三室のきしのもみぢぞを
　たつたの川のなみやまつらん

うぢの川ぎりは、人のめでたき事をさまたぐまじきたとへ。たつたの川の波は、人の福をうばはまほしきものゝいましめになん。

過ぬるを恨みは果てじほとゝぎす
　なきゆく方にひともまつらむ

身をつめば入もをしまじ秋のつき
　やまのあなたの人もまつらむ

かゝる人こそ、人の人なれ。「さくらちる時にいとふ春風は花なき宿ぞうれしかりける」といふごとき、風雅のうへは、かくいひなすも、あながちにくからねど、世のまじはりは、あひたがひに、人のためをおもふべきことなるに、われのみよかれがしとかまへて、他のうれへをかへりみず、意地わろく人をねたみそこなへるは、いときたなく、さもしき心ばへふかく耻べきことになん。

大ぞらの雨はわきてもそゝがねど
　うるふ草木はおのがさまざま

あふぎ見よ月の雲井のこゝのへも

八重むぐらをも隔てやはする

人に君たる御德は、かくぞましますべき。

おく山のおどろが下もふみわけて
道ある世ぞとひとにしらせむ

をさめしる我世いかにと浪かぜの
八十島かけてゆくこゝろかな

ともに有がたき御製なり、いやしくも國郡をしるも、そのほど〳〵につけて、此心あるべきことにこそあなれ。

思ふべき袖こそなけれ世のなかに
まづしき民のさむき夜なく

なべて世の民のうれへの深き江に
身をつくしても救ひてしがな

民の父母といへるは、かゝるいつくしみのおほん心になむ。

しづのをが門田の春ぞあはれなる
かへす〴〵も秋をたのみて

袖ひぢてうゑし春よりまもる田を
たれかはしらで狩に來つらん

こは、君たる人は、殊にふかく心をとめて味はひ給ふべき歌なり。かく稼穡の艱難を見そなはし、民のはかなき境界をしろしめさば、下をいたはり給ふ心ざし、おのづから切なるべし。「麥主の泪をこぼす鷹野かな」といふなるに、民のわずらひをかへり見ずして、しば〳〵狩し人をうれへしめて、我ひとりたのしまんこと心において忍び給ふべけんや。

大丈夫はおのが門田をうちわびて

春のこゝろも長閑けくもなし

いとまなみ夜田かる賤がうき雲の
かゝるをりにや月を見るらん

花にめで月にたのしむ時だにも、民はかく勞すらんと、そのおもひをおもひやりぬる、いと有がたし、かゝらましかは、世に不仁なる君はましまさじ。

みしぶつき植し山田に引板はへて
又そでぬらすあきは來にけり

穂にも出ぬ山田をもると藤ごろも
いなばの露にぬれぬ日はなし

山田の民は、鹿猿のふせぎおほかたならず、夜な夜なの辛苦いかにぞや、いとも〳〵あはれむべき至りなり。

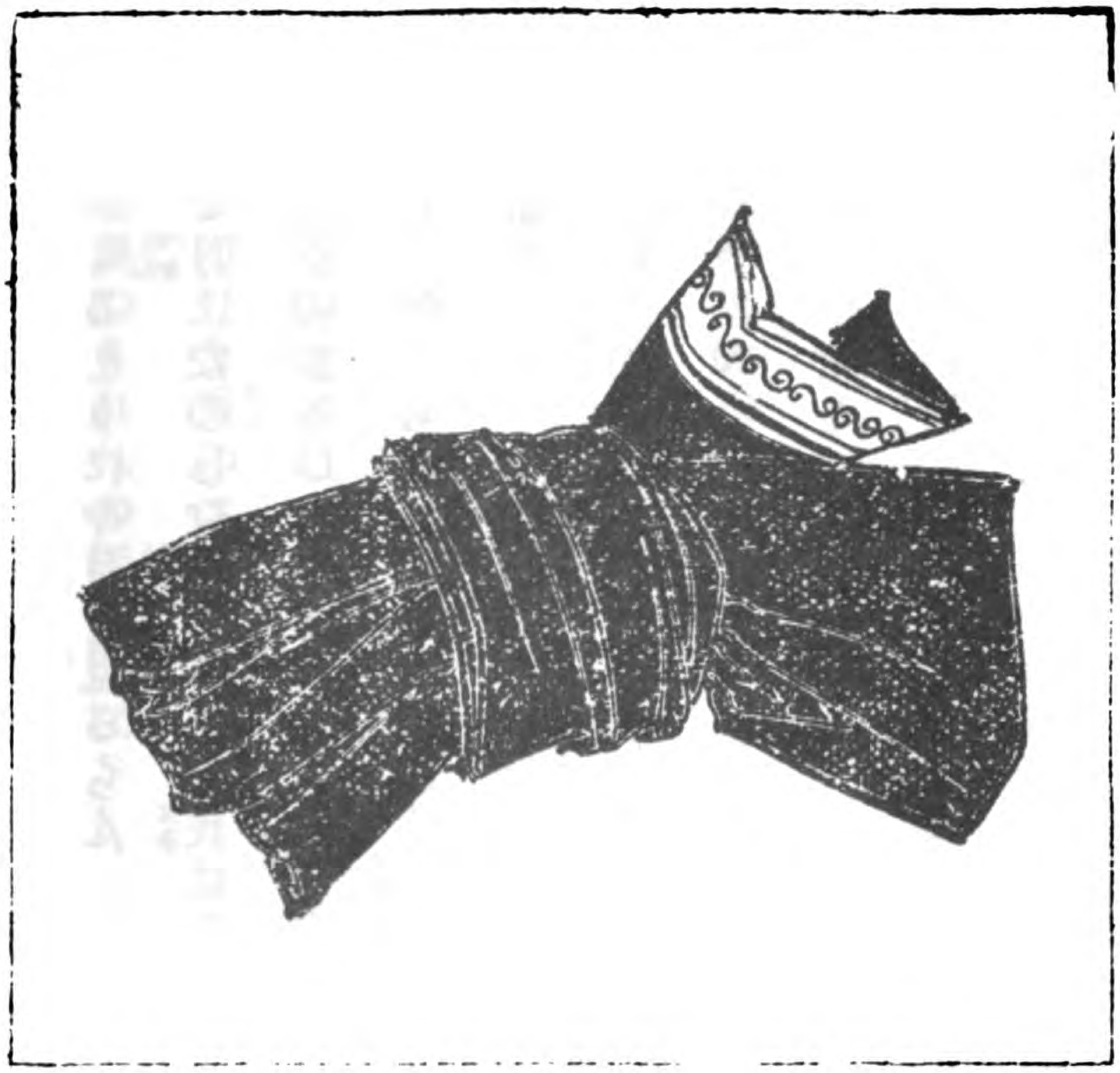
井蛙小錄　井上頼文

帯のむすびかた(承前)

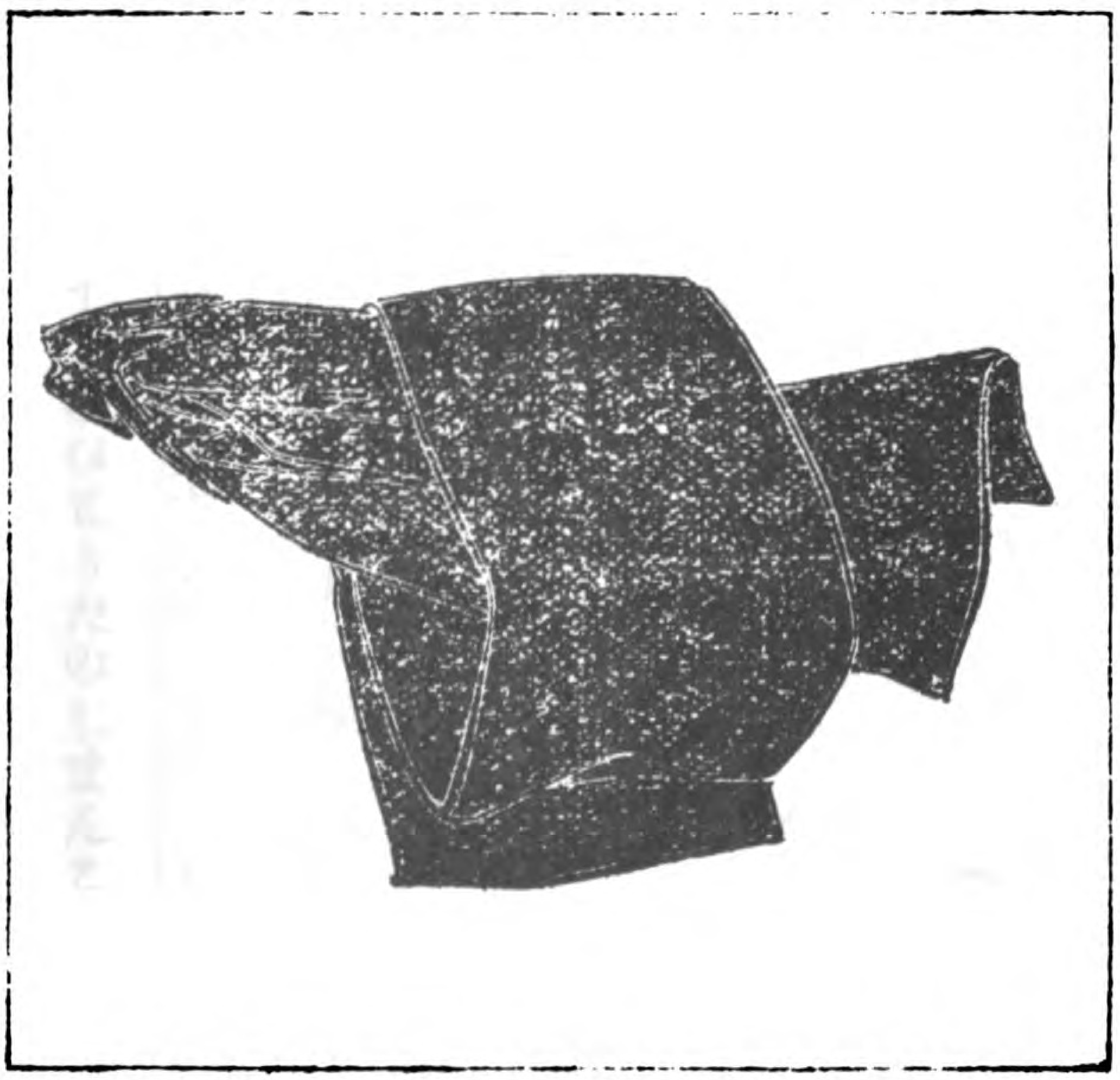
だらり結び

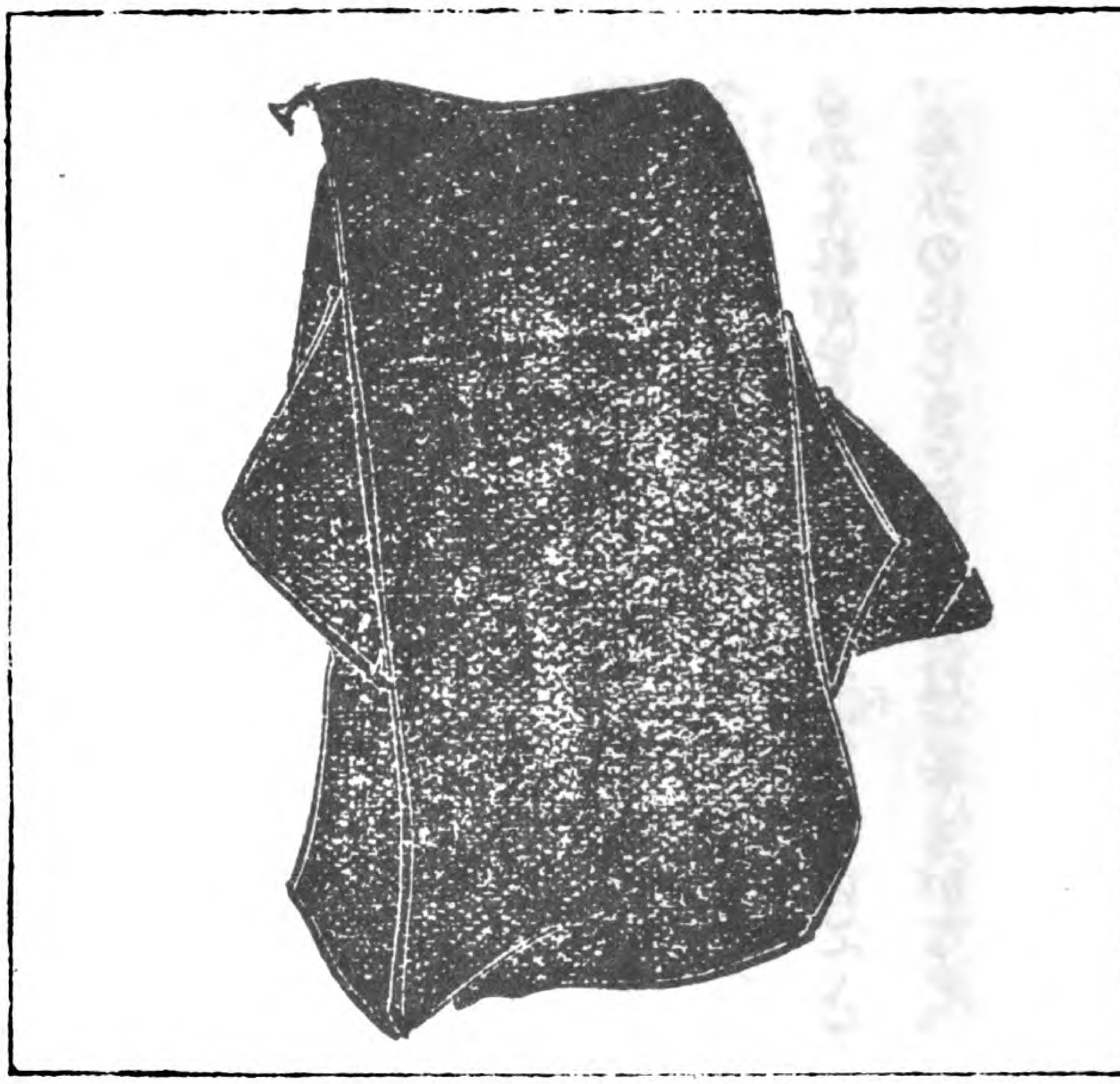


文庫くずし



ちどりむすび





正誤　先號一つ結の圖印刷の粗漏にて横さまに植ゑたるは誤なり左の方を上にして見直さるべし

衣通姫

萩野由之

衣通姫は、古へ美人の普通名詞なり、其意は、古事記の注に、所以負衣通王者、其身之光、自衣通出也、とあるが如し、記紀によれば、允恭天皇の時、此名負へる人二人あり、一は　允恭皇后大中津比賣命の妹弟姫一は　帝の皇后輕太郎女なり、娣と姪との間にて、傳の混じたるならんとの說もあれど、孰も艶色徹衣ばかりの美人なるからに、此名ありしなるべし、尚此外にもありしなるべけど物に傳はらぬなるべし　聖武帝の皇后安宿媛（此諱東大寺要錄に見えたり、大日本史に光明子を諱とかけるは、恐らくは誤ならん）を、光明子と名付けたるは、漢學流行の世なれどなるべし、これを國語に復すれば、衣通姫なり、源平盛衰記平清盛の息女を云へる條に、第五は近衛殿下

基通公の北政所、形嚴して水精の玉を薄衣に裹たる樣に、御衣も透通りて見えければ、父相國も、異名には衣通姫とぞよばれける、殿下も角と仰けれど、北政所も我御名と心得て、答ましくて、互に咲給けりと見えたり、古へ衣通姫の名の特稱名詞のやうになれるは、皆此類なるべし、

草根集（つゞき）

神なづきの比山里より散たるもみぢのえだにつけて

かくるかくれがをもらさぬたつたひめのこゝろばへを、やみのにしきとはなしはてずもがなと、まちわたりつるほどは、しぐれふる日も長くのみおぼえぬれど、なほなぐさむかたも侍りしを、いまはかく、いたづらに、散過にたるこずゑをみるに、此のちは、まして道もなくこそと、心ぼそさもさびしさも、いはむ方なくぞながめ侍る。

またれつる人のこゝろも紅葉ばも
うつろふ色をみはてつるかな

すなはちかへし

ちらぬ間は、もみぢ見にとやとおもひやすらひ侍りつるを、そのほども、いかにともおぼろかしたまはで、今はたかゝる御ことのはゝ、いづちの風のたよりにかと、かへりてかごともきこえぬべきこゝちこそし侍れ、いでそのしくものなきもみぢのにしきは、ちりにし庭も、なほおもひやられ侍るを、たつた姫の心をたよりて、さらにやとはむともえきこえ侍らずなむ。「もみぢ葉のうつろふ色をかで

とみていまよりのちはまたじとやおもふ。

霜月五せちの夜

あかつきに、わかちさまにいでたまひつるを、などていまゝでまゐり給はざる。御まへには、さるのとき過るほどにはまうのぼりたまひぬべければ、御ともにさふらふかぎり、みなそうぞきたてて御らんずるに、そこのいまゝでみえたまはねど、いかにしつるぞ。もし、こゝちなどやあしきと、心もとながらせたまふに、いでさには侍らじ、こよひは、はての夜にて、ことにいまめかしかるべくきこえしかど、例のこと好みのいとゞをとめの袖にもおとらじと、ねりかさぬるほど、かく時の移りぬれど、さすが心は空にぞ侍らんかしと申しつれど、わらはせたまひて、そでの羽衣にきそふなるは、いか斗にかとゆかしけれど、いとまちどはなりや。これきていまとくまゐるべくいひやれかしと、のたまはせて、こよひの御料に、そのより奉らせたまへる御ぞどもからぎぬもくはへてたまはせる也。わたくしにこのみどゝのへけむは、またりんじの祭もあめれば、けふは先とりあへずもと、かたじけなきおほせごとのまゝを、すなはちつたへまゐらするなり。

しはす月雪の夜にふえの音を聞て憐なる人のもとへ

遠里を野までもわくかれぬべき夜のさまなるに、まがきの山のへたてどかりは、雪深くともなどかはとて、例のはひわたりつゝ、御ことの音そゝのかして、としのなごりの心ぼそさも、なぐさみ侍

らむやと思ひ立つるほど、おもはずこなたの空にもの丶ねの聞えしかバ、よろづをおきてそゞだて侍るに、たか家にかよこぶゑを吹いだせるなり。さやけき月の雲ゐにひゞきてすみのぼれるは、をりから、あはれさも面しろさもたぐひなく、いでなむとせしも、わすれて、いとゞそゞろさむさに、せめて埋火をかきおこしつ丶、さながらはし近くてながめをれバ、友まちがほのにはのおもいと白むなるに、軒ちかき梅のうちゝるさまは、もろこしひとの言のはおぼえて、いはむかたなくをかしきを、たゞひとりのみ見侍ることのあたらしうて、おなじくはとそ丶のかし奉るとて、たゞ今のうちみるま丶をきこえ侍る。

笛たけのこゑすむよはに降そふは
春まつうめのはなのしら雪

かへし詞はなくて

深きよの道はしるべにまかせても
かをれる雪をいかでふむべき

いまひとつはをとこあるしのよめるなるべし

あらざりき間ふべかりしもとひもこで
待れつる身をまたむものとは

立かへり

いでや君まつてふ事はしりぬとも
とへとは我にかけずや有けむ

○

これは、あるやんごとなき姫君の御手本の、料に書てまゐらせよと仰らる丶に、おのれ、いとしもことしげくて、とみにもえ書くべからぬ

を、紀伊の宮のおまへに侍るよ野子は、おのがかゝること聞しおきつれば、かゝせて奉りつる也。

眞淵

○

こは、餘野子のみづから書たるに、うしのおく書くはへられたるを、ある人手ならはむ料にもせんきよらに書うつしてよ、といたにゐりてひとこふによりて、書つ。うしの手は、其まゝすき寫しにせり。千蔭をさなかりし時、よみ歌見せてよなど、よの子がいひおこせけるまゝに、書てやりつれば、其をりせうそこせし事などありき。あふさきるさにて、そのあたりあひ見しことはなかりつれど、ちかげよりも、はやくうしにつきて、歌まなびせし人にて、うたも文も、うしのほめ給へりしなれば、かゝるものをだに世にのこさまくおもひてかくなむ。よの子は、紀の殿につかうまつりて、瀬川ともよべり、稱殿益一のいもうと也。後に、おまとなりて、涼月院といへり。天明八年十月八日、とし六十七にしてみまかりぬ。

文化四年初秋　　千蔭

（をはり）

忠孝二筋道

其二

渡部乙羽

蒲柳の身ながら、命を無きものにしては、世に恐るべきもの無しとは云へ、花は嵐に勝つことならぬ女子の優しさ、男とは少しく異りて、流石に奉行所の怖ろしかりき。

靜江は心の急くまゝに、その門を入りて、白洲に端然と座したれども、針の莚に在る心地して、靜に四邊を打見やれば、先づ役人の威嚴に打たれて、自ら頭の下りぬ。書に見たる地獄變相も斯くやらむ、牛頭馬頭の鬼にも似たる與力同心の棍棒支きて立てる樣うたてく、淨玻璃の鏡にも似たる奉行の眼は、ぎろりと光りて、靜江をジッと睨み詰めぬ。

靜江は事そ浅猿しく、つら〳〵思ふに、罪科無き我の斯く怖ろしきを、況てや若君は未だお若うまし〳〵て、常は破魔弓よ菖蒲太刀よと戯れ居給ひし身の、如何に御苦勞遊ばすやらむ、聞けば八丈が嶋は、氣候極熱にして米に虫つく恐れあれば、粉

にして蓄へ置くとかや、住むは髯むしやの嶋男のみにて、人喰ふ鬼も変り居らむ、鳥と云つては濱千鳥、花と云つても野に咲く菊、荒布の衣に竹の杖、生甲斐も無き生活とかや、その中へ何うして若君一人を手放し遣らるべきも、例え父君に罪ありとも、未だ頑是無き若君に科はあるまい、赦免を願ふに叶はぬ事のあるまじと、早くも度胸を定めつゝ、物を云はんと平伏したり。

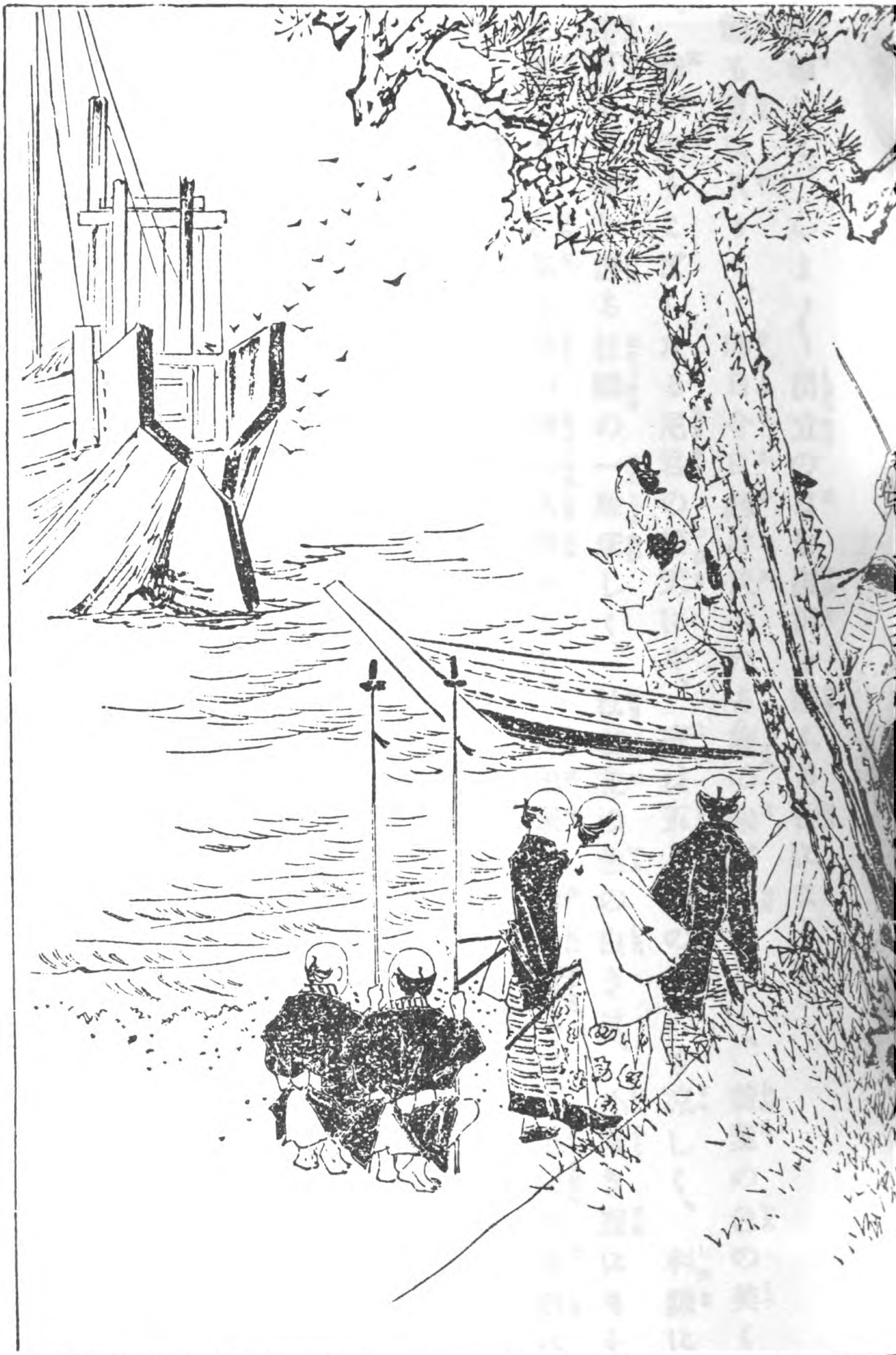
奉行は扇を笏に搆へ、靜江の顔をジッと睨みて。イヤナニ女、其方が氏素性は唯今これなる與力より聞取つたが、そして其方浮田家の家來と申からは、秀家の身の上に就きての哀訴か、叶はぬまでも委細の様子申上げよと、言葉を和らげ問ひかけたり。靜江は慇懃に一禮述べつ、秀家公の御身の上にてはこれ無れけど、その若君が八丈が嶋へ流され給ふにつけ。妾は御幼少の時分よりお傍を去らず仕へし者、是非にお供を願ひたき所存、此儀特別の御詮儀にて御免下されませと、半は涙に変りつつ嘆願すれば、奉行は俄に目に角立て。ならぬ、其儀罷成らぬ、浮田秀家は一方ならぬ大罪人、巳に打首にもなるべき所を、薩摩宰相の哀願により、一等を減じて流罪と極りたるを、其方家來の身として、上様の御高恩を難有き事とも思はず、其上

つ哀願、決して御免相成らぬぞ、下れ〳〵、目通りは叶はぬと、荒々しく座を立たんとするに、靜江は慌てゝ寄らんとするを、與力はその前に立塞りて、下に居らうと叱りぬ。斯くては最早詮術なしと、靜江は拮と覺悟を極め、懷劍引拔き吐嗟斯うよと見えけれど、與力同心驚き騷ぎて、何故の自害ぞと右と左より押止めたり。靜江更ゝ合點せず。何故の自害とは思ふても見給へ、これまで傅せし若君の、遠き島根に流され給ふを、餘所に眺めて居られませうや、寧そ殺して下さりませと、身を震はして泣き沈みぬ。

罪無き婦人を殺しては、後に上樣よりお咎めあり、それ自害を止めよと役人の下知に、三人四人の同心集り、靜江が懷劍奪ひ取れど、たゞ泣くよりぞ詮方なし。この時奉行は、出で來り、過分の願ひなれど。其方が忠義に免じて、一應其向に伺ひ見るべし、宿に歸りて後の沙汰を待てよと、云はるゝ儘に奉行所を出で、先づは宿所に歸りけり。

待つ事ある身の、今日と暮れ明日と暮して、はや二月餘になりぬ。靜江が念力の愛に屆きて、或日奉行所に召出され、八丈が島隨行の儀を差許されたれば、天にも昇





るべき心組して、いよ〳〵出立の日を指折り數ふる程になりぬ。折から節も夏に入りて、昨日今日懸け代へたる簾の未だ新らしく、若葉の色の美くしきは、誰が剃りこぼちたる尼君の腦天にや、夜は五月雨の霽れて凉しく、利鎌に似たる半月を、啼き渡る杜鵑の一聲床しく、杜若花の色の白きは、小暗き庭にもそれと見え透きて、花無き時の興一入深かりき。浮田家の御臺所には、上段の座敷に机を置き、絹張の行燈の下に文讀みさしておはせしが何をか思ひ出されけむ、袖を顏に押あて丶潛々と打泣き給ふ處へ、腰元の案內して靜江を此方へ導き來りぬ。御臺所は見給ふや否、膝をじり〳〵と摺り寄せ給ひて、靜江よう來てたもつた、そして船出の日は何日なるぞ。はい、出立は明日の明六つ、住吉の浦より參りまする、就きましては一子權之亟當年三歲になりまするが、流人の妾には却て足手纏ひなり、是非御引取下されて、成人の上は出家になして下さりませ、これさへお預け申ますれど、外に心殘りは御座りませぬ、もうお去らバで御座ります。あれ〳〵門口に捕手の乘が待つて御座ると、淚を隱して立出れど、御臺所は泣く〳〵も物見窓より顏さし出し、見送る影も朧月夜、頓ては闇に掻き暮れて、見えずなるこそ本意無けれ。

船出にうたふ唄ならで、流さるゝ身の果敢なさは、死ぬにも増して辛かりし。攝州住吉の浦は目出度名所の一つなるに、今日は如何なる惡日ぞや、波は遠嶋の人を載せて、岸の砂路を別離の涙に濡らしたり。

文林

水邊山吹　近衛　忠煕

山吹のかげこそうつれみなぞこに
　こがねの砂をまくとみるまで

幽居山吹　東久世通禧

とふ人をまちしさくらは散果てゝ
　山ぶきさきぬやまかげのいほ

鍋島　直大

よはなれて野中の庵はやまふきの
　花計りこそともにはありけん

松下山吹　黒田　清綱

山吹のはなのさかりにうつもれて
　ありとも見えぬ松のまたみづ

水邊山吹　前田　利嗣

けふみれば若鮎さばしる川の瀬に
　咲きみだれたりやまぶきの花

櫻狩　諏訪　忠元

かりくらしなはも心のあきたらで
花の木かげにやどしやすらふ

水邊山吹　黒川眞頼

よし野川いはこす浪やかゝるらん
白きもまじるやまぶきのはな

幽居山吹　植松有經

ひとりだにとふ人はなし我やどの
八重山ぶきはさかりなれども

小出粲

蛙なくやまだのいはのさびしきに
ちりみたれたりやまぶきの花

水邊山吹　谷勤

青葉のみうつろふ宿のいけみづに
なほ春ふかしやまぶきのはな

内藤存守

蛙なくいけのやまぶきみるまゝに
神なびがはのおもほゆるかな

坂正臣

岩清水むすばんとする袖のうへに
ちりかゝりけりやまぶきの花

粲花　片岡正占

これもまた土の底よりほりいだす
こがねの花といふべかりけり

山吹　西川須賀雄

夕ざれど井手のかへるの聲すみて
八重山ぶきにいり日さすなり

水邊山吹　糸山貞幹

山吹のこかねはなさくかはなるを

玉とはたれかなづけそめけん

春旅行　藤井行麿

老ぬれどさくら山ぶきさくころは
はるの旅ぢはものうくもなし

於春於花　佐々豊水

みつくりのなかの湊のなかなかに
名をしかくはし春のはなの香

月前花　草野隆道

夕月のかげにぞにほへやまのはの
花はくれてぞみるべかりける

山家花　千日亮

咲きつゞく花のさかりは山ざとの
垣ねのみちもにぎはひにけり

散歩のをり　森馬太

すみのぼる琴の声らべは大ぞらの
月よりたかくすみわたるかな

社頭花　松島芳麿

空たかくたかしる千木に白くもの
かゝると見しはさくらなりけり

幽居山吹　鍋島榮子

よの中を隔てんとてかなゝゑやゑ
さきかこひけりやまぶきの花

水邊山吹　前田朗子

かきね行く水のながれに山ぶきの
うつれる影のうるはしきかな

幽居山吹　松平健子

世をすてし我かくれがは山ぶきの
くちなし色もこゝろありけり

遣水もちりにうもれしわがやどの　　鶴　久子
かきの山ぶきはなさきにけり

水邊山吹　　中島　歌子

行く春をせきとめかねておのれ先
ちるか川瀬のやまぶきのはな

海邊花　　諏訪　晴子

ゆきかよふ車のおともたかなわの
海べのさくらいまさかりなり

花交松　　安東　菊子

枝かはす花のにほひにおひまつの
みどりの色もわかやぎにけり

貧家櫻　　小川　昌子

物たらぬ賤がふせやののきばにも

咲きあまりたる八重さくら哉

花　　師岡須賀子

人のよはかくしもあるかな櫻ばな
さきぬと見れば散はじめつゝ

春日述懐　　鹽井　雨江

窓の外の　梅さきにけり
くちはてし　軒のつまさへ
うちかをる　心地ぞすなる
門ちかき　柳もえけり
かれ殘る　柴のそでがき
いろ深き　心地ぞすなる
老かはあれ　老かはあれども
たらちねの　かしらの霜の

おきて見え　ふしても見えて
わすられず　えもわすられず
わぎも子の　繰るをだまきの
まなく見え　ひまなく見えて
わすられず　えもわすられず
こもり居て　世をしなげゝバ
ひとり居て　身をしうらめバ
山に立つ　かすみもつらく
野邊に敷く　春日もさむき
わがこゝろかな

芳野懷古　勝家貞良

みよし野の芳野の山は　今もなほ昔おぼえて
白雲のたなびくがこと　白雪の積もれるがごと

咲きにほふ花の盛は　目もあやに見れ共飽かず
天の下山はおほけど　この山の櫻にまさり
この峰の花にまさりて　美しきものこそなけれ
そこもへバあやに貴し　こゝもへバいとゞ愛し
然はあれど都となりし　古をおもひかへせど
かくばかり咲ける櫻も　かくばかり匂へる花も
事とはむ縁にもあらず　尋ね見ん便しなければ
中々にうさこそまされ　其思へどあやに悔しも
あやにかなしも

反歌

いく春もかはらぬ色に咲きにほふ
さくらに曇るみよし野のやま

月雪花優劣論

勝家貞良

大空にすみ渡りたるさやけき月影には、心のちりも晴れぬべき心地やすらむ。天地おしなべて、白金の眞砂をしきたらむかと疑はるゝ雪の朝の景色には、心の駒もとゞめかたからむ。霞か、雲か、はた、雪かとばかり、朝日に匂ふ山櫻花は、しきしまの大和心をふるひおこすならむ。月のかげ、雪のけしき、花のにほひ、この三つのもの、いづれか哀ならざらむ。何れかおもしろからざらむ。いづれめでたからざらむや。さはさりながら、花の匂はあせやすけれど、時の間なり。雪のけしきも消えうすれど、あとかただになし。ひとり、月の影にのみ、よし、村雲のかゝる折こそあれ、隙あれど、すなはち出でゝ、隈なく、千里の外まで照らす。されば、月こそ、わきて優なるものなめれと、ひとりごたれつゝ、窓の戸おし開きて見やれば、高嶺の花のよはひ、一しはしるくて、大空の月のかげ、おぼろげなるぞ、いとはづかしうて、詞なくて。

人の立ち振舞ふべきやうにて品の程も心の底も見ゆるなれば人目なき所にても垣壁を目と心得てうちとくまじきなり

(足利義將)

雜報

●國字四書　二十歳の妙齢にして、はやく、良人にわかれ、爾來、かたく貞節をまもり、其の美貌を以てして、敢て、ふたゝび嫁がず、まことに、貞にして淑、美にして賢。よく老親を孝養して、天年を以て終へしめ、よく幼兒を愛育して、世に立つことを得しめたる米澤藩の黒井繁乃とじが、その子信藏ぬしの讀書を助けんがために、鄰翁の、信藏ぬしに授くるところの咿唔のまに〳〵、屋外に在りて、かなもて書い記せるものを、國字四書といふ。國字四書は、げに、信藏ぬし、立身出世の寶典たり。いな、たゞ、信藏ぬしの寶典たるのみならず、世の母たる人の寶鑑なり。いま、ゆくりなく、この寶鑑を見ることを得たれバ　その二枚を寫し取りて、やがて、卷首に記せり。こを讀み給はん世の人々、あはれ、なほざりにな看過ぐしたまひそね。因にいふ、黒井繁乃とじのことは、本誌第十二號の史談のうちに詳なり。

●河村伯の北堂　府下飯倉狸穴町四番地伯爵河村純義氏の北堂ゆか子の方は、今年七十七の高齡に躋られしを以て、先頃、親戚知人などを集へて、盛なる賀筵を催されたりしが、このゆか子の方は、淑德の聞ありて、家庭の監督など、至りて堅く、嚴に、起居擧動、禮に協はざれば已まざりき。故に、冬の夜の寒さにも、曾て炬燵を用ゐられこともなく、

蒸熱き夏の日にも、午睡などせらるゝこともなく、眠氣のさし來る時あれバ、鎌をとりて、跣足にて、庭の木蔭に下り立ち、雑草を除き去るを例とせらるるとぞ、かゝる嚴なる家庭に生ひ立たれしを思へば、河村伯が今日あるも、げに、さもあるべきことなりけり。

●跡見女學校の卒業式　去る九日は、跡見花蹊ぬし五十四年の誕辰なるを以て、其の祝莚を兼ね、卒業證書授與式を擧行せられし由なるが、その證書を受けたるは、左の六名なりとぞ。

西村　菊子　加茂玉枝子　伊澤　房子

江林　町子　山崎丑枝子　小林　茂子

又、ぬしが、敎育に、心を注ぎ、女子の薫陶に從はれしことは、既に、二十年の久しきに及び、其の間、生徒に授けし習字帖は、皆、自筆せしものにて、今や、積みて、一萬帖の多きに達せりとぞ。ぬしが平生勉强の程、實に感ずべきことになん。

●貞女の眞相　とは、如何なるをか云ふべき。今の世にもてはやさるゝ貞女などの中には、實に、一時かぎりの貞女もあり。又、其の行の正しき道、直き理には適はざるもあり。かくては、或は、後、不貞となるものもあらん。又、貞節の名に合ざるもあらん。あゝ、いかなれバ、かく、貞女の亂稱をなすにはいたりしぞ。人に寸善あれど、必、之を取るは、信に、善を勸むるの道にはあれど、妄に、美稱を下して、其の實を失はゞ、將、之をいかにせん。善も不善も、恐らくは、混じて明ならざるべし。すべて、中道にかなはぬ行などをも、

いたゞ賛稱せんは、中々にあしきことにて、却りて、世の人をして、眞の正しき道を誤らしむるの畏れあることとなり。此頃も、美談とて、須磨にて、自殺せし横山某とかいへる婦人の事など、頻に稱賛するものあれども、其の行の善惡を、細く見た、唯ゞ其の二夫に見えざる志の、深く憐むべきはあれど、父母を措きて、命を亡ふなどは、またあるべきことにはあらず。且に、佛門などに歸依して、已の一身の憂を慰さむるなどのは、何の益する所もなき事にはあらずや。かゝる行をだに、貞といはゞ、世には、貞の眞相は明ならざるよいたらん。もし、世に、其の身を愼み、其の行を正しくし、始より終まで、人道を遂へず、父母兄弟にも、能く、其の道を盡せるものあらんときには、はた いかにか、之を稱すべき。

●女子の英語　お轉婆女學生、英語を弄して人を嘲るの用に供す。老婦人、嘆じて曰はく、今の女子供は、姑を惡口する爲に、英語を學ぶのみと。近刊の日本人といふ雜誌に見ゆ。日本人といふ雜誌は、むねと、男子のよむべきものなりと思ふ。その男子のよむべき雜誌にして、女子を警むること、かくの如し。世の女子にして、果して、この事あらば止みなん。若、この事なくば、日本人といふ雜誌、責めでおくべきやは。世の孃娘諸子、おのもく、その身を省みて如何。

●世の諸孃に告ぐ　頃日、百般の事、開明に赴くに隨ひて、女子の教育も、亦、大に進歩し、天ざかる鄙の賤が小女らも、文机に向はぬはなきに

至れるは、誠によけれども、其の風俗の、益、浮薄になり行くは、いみじう慨れたきことなり。故、やゝもすれば、只、わづかにても習ひえたることを、人にほこらひ、未、知らざることをも、物知り顔にせざれどならぬものと思ひて、道行くにも、所せき樣に歩むを、よきことゝ心得ぬるものあるこそ口惜けれ。すべて、女は、人の妻となり、母となるものなれば、何事も知らでやはあるべき。おのれの責は、中〳〵に重きものなり。其の兒を養ひ訓へ、家の內のことを治め、夫につかふるにも、舅姑につかふるにも、他人に交るにも、事にあたりて、是非をわいたむるにも、必、學問なくては、ねかなはじ。これらのことを外にして、學問する今の人人の如く、專、歐米の婦女をまねばんとて、あたら、我國の貴ぶべき婦德を棄てゝ顧みざるは、いかにぞや。かゝれば、女は、物學びに、あまり深からんよりは、むしろ、普通の物學終らで、比賣鑑、烈女傳、孝子傳、又は、婦女鑑などやうのものを見て、常に、心に省み、德を修め、家にありては、其の父母に事へ、兄弟に親しみ、能く、其の夫を助け、家を治めんことをつとむべし。かくせば、男女同權など、こちたく言はずとも、おのづから見さげられぬやうになり行くべし。歐米婦人の位置よりも高くなりぬべし。聞くもいまはしき彼の國ぶりの語にて嘲づるよりも、骨もなき小說などを書かんよりも、一志はまさりなむ。あはれ、世の諸孃、古のさかし女を鑑みて省みる所あれかし。

（忍山狂客）

教の庭

四月廿日兼題　平政子

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　大坂府丹北郡三宅村　橋本かずえ

なり出る身のあらましは兼てより
　かへしかゞみの影に見えけん

地　千葉縣印旛郡佐倉宮小路町　植木綱子

鎌倉に世をしるあまとなりにしも
　かへつる夢のしるしなるらん

人　熊本縣菊池郡隈府町　千々波橘子

女郎花をゝしき名をもたてにけり
　かまくらやまにさき殘りつゝ

大樹とて世に仰かれしはゝそばの
　ほまれはたかしかまくらの山　石井徳子

今もなほ世に殘りけりかまくらの
　おい木のさくらさきし匂は　高井米子

身をてらす末の光ははらからの
　うつしかへたるかゞみなりけり　上野兼子

見し夢をかへて時めくおもかげを
　うつすかゞみは世を照しけり　土生清子

みづ枝さすかまくら山の花うむら
　木の下ぐさもなびきぬるかな　河野文子

時をえてこゝろのまゝに榮えけん
　かまくらやまの峯のひめまつ　永井さい子

言の葉に傳へていまもきこえけり
　かまくらやまのおいまつの風　内田けい子

見しゆめを鏡にかへてみなもとに
　つかへての末さかえをぞまつ　豊田きさを

なきあとの幼き子らを守りたてゝ
　世をも亂さぬあまがかしこさ　豊田てつ子

我が父と共にきみをバたすけつゝ　みだれたる世を治めつるかな　近藤しな子

一すぢにたてしこゝろの動きなく　世のたをやめの鏡とぞなる　菅谷こう子

かまくらのあふぎがやつの壽福寺　見るにつけてもしのばるゝ哉　菅谷とく子

みなもとのきよき流もきみなくバ　いよ〳〵末はにごりはてまし　佐々有鄰子

立花のみのゆくすゑをひもかゝみ　うつしかへけん心ゆかしも　小橋　幸子

今もなほかまくら山のひめまつの　ときめきし世ど忍バれにける　馬島久仁子

玉だれの内のたすけのなかりせバ　かまくら山は世にもしられし　野尻　鵠子

さもこそは人もたふとめ大丈夫も　及ばざりけりきみがいさをは　櫻井とよ子

さちゆめをうつしかへたる鏡こそ　行すゑてらすはじめなりけれ　八太　光子

をだ巻のふしこそいとゞ悲しけれ　岡　佐波子

身の歎きさへくりかへしつゝ

牝にはとりわかつき告る聲すなり　かまくらやまは雲ふかくして　松田　静枝

うば櫻ひとり笑みけりさがみのや　かまくらやまを我ものよして　松田いし子

足曳のやま木のたちを遁げ出でぬ　ひとの妻たるみちも踏まずて　松田　孝子

妹が見しその幸ゆめをおのが身に　うつしかへたるますかゝみ哉　松田　繼子

春すぎて残るおい木のうばざくら　かまくらやまになほ匂ひけり　吉田　芳子

ます鏡おのが身にのみはらからの　見しさち夢をうつしかへけん　横敷たか子

時得ればひともと残るひめまつも　かまくら山をおはひてそすれ　坂口しん子

我ものとかまくら山をしめつゝも　のこる老木のうばざくらかな　坂口たみ子

さかしらにゆめにかへつるます鏡　世をくもらするものとなり鬼　師岡千代子

たのみつる大木のかれて天のしたしたかげに咲く撫子のなかりせバ　青木　春子

我ものがほにおほふひめまつかまくら山はにほはざりけむ　水谷　清子

たきゝてるかまくらやまの女郎花ふしも高らにさきにけるかな　伊達富貴子

妹の見し夢をうつしてうつゝ身にむすびかへたる人かゝみかな　棚橋すま子

四月廿日兼題

産衣に添へて贈る文

天　府下本所區中の郷業平町　八太　光子

かねて此月はと待たせ給へりしもしるくよべいとたひらかに千年經ん松のみどり子生れいでさせ給へりとうけ給はるなんいと〳〵めでたくうらやましきうごきなき君が園生も猶幾萬代の根ざしかためさせ給ひてかぞいろの君の御よろこびはいかたかりかと思ひやり侍りさてことほぎのしるしに産

きぬ一くだり參らすにはかに思ひおこしていそぎ調ぜさせ侍りしかバぬひさまのかたはなるはさるかたにゆるい給ひてよなはあすかあさての程まゐ出で萬きこゆべくなんあなかしこ

地　兵庫縣出石郡出石町　岡木　庫子

拙き走りがきしてきこえさすげにきのふけふはかしこのやま邊こゝの園いづれ花ならぬはなくそゞろに心も浮立つバかりに候を御二方ともいかにわたらせたまふらん日にそひておひたゝせたまひつらんといとゞゆかしうなんあさてはうぶすな詣したまふてとのめでたさよ御祖母樣はじめ皆々樣いかに其のまうけにいそぎたまふらんとおしはかりまつり候此産衣一かさねは先頃都よりとりもとめ申しゝを拙くもまねびぬひ侍りつれバごらんせさすまた鯉一尾は子持の君にまゐらすわらはもまうでゝほぎこと聞え上げまつらまほしう思ひたまふるものから私事にかまけつゝいとはいなくも久しくてかくなんむらいの罪さりところなきを廣き御心

に容れさせたまひてよあなかしこ

人

熊本縣菊池郡城北村　佐々有鄰子

妾が心をこめて贈りまゐらする此のかにとり草のもやうを染めたる産衣は禮式家の竹原氏につたへし從二位細川藤孝卿よりの口傳ある産衣になんありける妾が父は竹原家のをしへ子にては首坐をしめて禮式のゆるしを得たる人なれどその口傳をそのまゝにこれの産衣に籠めて縫ひ立てさせたれどかにとり草のかにもかくにも掃部づかさのかけずくづれず千代の齢萬代の壽たもちたまはんことを松のみどり子にかけてたゝへまつるになん

菅谷こう子

なにゝまれこゝろにまちわぶることのあらんには月日のすぎゆくはなか〱におそきよしなりかしされどそのことのきぬれど月日のすぎゆくことといとはやきものになんそれかあらぬかふりつゞく梅雨の空けふはなごりなうはれたれどいとうれしくて庭に出てみどりの松池の面に龜の遊ぶなど打ながめつゝありしにまちわびたることのいとも〱はやくてやす〱とめでたく男の兒さへ生れ給ひぬといふにうれしさぞいやましぬる玉は崑岡とやらむにうまるゝとやさぞなのち〱はかしこき人ともなるべからめど今より幾久しく鶴龜のよはひをいはひつゝそまつなる産衣にそへてかくなむあなめでたうれしさを何にたとへん産衣のせまき袖には包みかねつゝ

羽田かせ子

このほどはやすらけく御身ふたつとなりたまひてことよ男のこ子のよしいはひたとはゞつるかめも猶あかず御よろこびの聲は御うちにみち〱てさかえ賑ふ御ことゝ思ひ侍ればけふこそはまゐりて御ありさまを見まほしうおもひわたり侍りつるをあやにくなる人のおとづれ給ふにくちをしう思ひとまりはべりされどしもつかひをしてみどりのいろにしらあやつけたるうぶき一重松にすごもる鶴の毛衣によろひて千とせ萬代と御いはひまをす心

ざしをうけ納めたまひてよかしこ

岡　佐波子

兼ねて今月は御臨月と承りたれど御案じ申し居り候ひしによべ目出たく產のひもとけ給ひて玉の男子君生れましぬとかやいかに御兩親樣はじめ御一同よろこびおはしますらんとおしはかりまゐらするもなか／＼の事になんさて母子樣共に何の御さはりもあらせられずすくやかにまします事幾千代こめて御祝ひ申上侍りよりて此產衣一重なめげには侍れど御祝ひのしるしとして御目に懸け奉りぬあはれ萬代かけて御納めさせ給はゞとよなうれしくなん何れ近／＼の內參りて御目もじの上ゆるゆる御壽ぎ申上侍らんかしあなかしこ

北川　貞子

よべは何となう月の光もさやかなる心地せられしを玉も恥らふばかりのをの子でやす／＼とうませ給ひ誠に御ふた方ともすか／＼しう渡らせ給ふよしかた／＼のおん嬉びさこそとおしはかられ侍りよりてうぶぎ一重いと見苦しくは侍れど御祝ひまゐらす此は娘に調ぜさしゝまゝ縫樣などいといとしどけなきは幸にゆるいてよ明日はさぶらひて萬のことどはきこゆべくなむあなかしこ

吉田　芳子

かねてふくらかにおはすと承り侍りしをよべいと安らかに玉の女子うませ給ひつるよしいともいともめでたきことになむ御一族の御よろこび嘸かしとおしはかりまつるもなか／＼愚なりいで御よろこびのしるしもがなと思ひおこし侍れどあさましき身の恥かしさはいかにつゝみ侍らむたゞ心ばかりにとてうちいで侍りつる產衣をいとあやしうてなむあなかしこ

五月兼題

五日
歌……首夏月
　　時鳥を聞きて
文……懐をのぶ

廿日
歌……卯花
文……書を看る記

餘芳

みちのつと（つゞき）

小池道子

道のかたへには、枇杷の木立、多く見ゆ。左の方に、崇峻天皇の御陵の札あり。つづらをりなる山ぢに、絶えせぬ物は、水のひゞき也。

谷川のいはねにかゝる水の音はこがくれたれどしるくぞ有りける」。峰の事務所にて、いこはせ給ひ、談山神社にまうでさせ給へり。かゝるたぐひなき行啓につけても、氏の御さかえを、神も、いかに、うれしとおぼすらん。御玉ぐし奉らせ給ひて、拜殿にて、縁起の巻物、寶物ども、つらねて、御覽せさす。十三重の塔は、みはか也とぞ。物さびたるみ有りさまども、例の書きとりがたし。木立ものふりて、雲ふかきみ山のおく、常ならば、すごかるべきに、みとも人のとよみ、士官の駒の、いなゝく聲さへ聞こえて、いとにぎはしき夕なり。櫻井よりかへりおはしましつる、やがても、雨風はげしうなりぬ。今夜も、里人ども、琴をそうす。

廿一日曇、午前七時に、こゝをたゝせ給ふ。右の方につらなりたるが、かつらぎ、金

剛山なりと。更に、多武峰をあふげバ、まことに高し。左の方に、天の香山みゆ。ふもとに、家ゐありて、衣ほしたりと、のたまはせたりけんむかし、そのあたりみる心ちす。なき澤のもりは、いづく成るらん。すべて、古の名所といへバ、大きなる所に、めとゞむれど、おもひの外なる所も有り。畝火山、まはに見ゆ。いたゞきに、みやしろのやうなるあり。神武天皇をいつき奉れりとも、神功皇后をまつり奉りしとも、いひつたふるよし也。耳なし山は、いづくぞ〳〵ととへど、こたふる人なし。

駒の引く車のひゞき高けれバとへどこたへず耳なしの山」勅使館にて、清めさせ給ひて、神武天皇の御陵にまゐらせ給ふ。みうしろにぬかづくかしこさ、いはん方なし。

廣前に玉くしとりてうねび山高きみいづをあふぐけふかな」と、宮のよませ給ふ。また、柳原權典侍も、

うねび山のぼりてみれバ千はやぶる神代もちかくおもほゆるかな」。安寧天皇をはじめ奉り、ちかきわたりの御陵、み車のうちながら、拜し給へり。檜隈川をみ

ながら過ぎ行く。戸毛にて、ひるのおもの聞こしめす。此のわたり、古瀬村といふよし也。こゝより、みこし奉る。吉野郡と志るしある所に、緑円有り。大きなるさくらのえだ、さしろへたり。

花くはしよしのゝ里になりぬとはさせるさくらの色にみえつゝ」。いくへともなき山をこえ行く。後醍醐天皇のむかしも、此の道よりや、いらせ給ひけん。そのころは、いかにさかしかりけむなど、すゞろに、むかし志のばれて、心せまれり。女官たちも、志たがひ奉りて、此の山ぢ、分けいりしおもひ、いかなりけんなど、さま〳〵に思ふこと、はた、すくなからず。かたへの山のうへよ、つみたるもの有り。何ぞととへば、これは、行者ののぼるごとに、石ひとつづゝ、もてゆけるが、つもれる也とこたふ。こたひの行啓に、人民の、みちつくりして、此のわたりも、こえ安くなりにたりなど、ついでにかたる。かゝる山奥ながら、拝み奉れる人の多きは、おどろくばかりなり。

家かずは有りともみえぬ山陰の道のまに〳〵人のむれたる」。車坂たうげに、御野立あり。よし野河、はるかにみえ初めたり。郡官をめして、ところ〴〵の名ぞ

も、とはせ給へり。右の方にみゆるが、白かねがだけ、何がしの山などいへど覺えず。左の方にみゆるは、紀の山にて、いたう霞みたる方ぞ、よし野なるといふ。

よしの山かすみをぐらくみゆるかな花は青葉になりはてぬらん」。この先の下市といふ所に、維盛の中將、ひそみ給ひしすしや、今に有りなどかたる。みともの人人、近衛の士官、さるべき限りめして、さかしき道につかれつらむなど、仰ごとを有りて、くだ物給ひなどす。御野立のうへに、おしなべて、つゝじ折りさしたり。里人の心しらひなるべし。こゝより、のぼりくだりて、越部にて、また、やすらひ給へり。みちにむかへ奉れる人、いよ〳〵多く、學校の生徒、男も、女も、列をたゝして、むかへたてまつるを、ことに、みけしきうるはしう、見えさせ給ふ。さるは、いづくもかはることなけれど、かゝる山ふかき所まで、いたらぬくまなきを、めでさせ給ふなるべし。柳原權典侍、

みよしのゝ吉野のおくにすむしづも道をしへくさつむよなりけり」と讀み給へる、ことわり也。

ひらけゆくまなびの道にかなしこがすゝみにけりとみそなはすらん」と、まね

び出でたるは、歌にもあらざるべし。芳野川のながれにそひ行く。いは波たかく、水のおとすゞしう、名高き川ども、あまたわたりこし、めにも、ことに覚ゆ。はしの上より見れど、舟方としるして、河中に、いろ〳〵の花をさしたり。籠は、なはもて、つくりたる心しらひ、面白し。はしをこねたる所、六田のよどなるよし、こゝよりの坂、けはしくて、まろび落ちぬべき心ちす。すこし、たひらかなる方に、みこしとゞめて、いかださしおろすさま、御覧せさす。早瀬をさしおろすさま、時のまなり。さくらの木だち、むら〳〵と見えそめたれど、みな、青葉になりぬ。右の方に、つか有るをみれど、大塔宮にかはり奉りて、戰死したる村上彦四郎義光の也けり。此のわたり、古戰場なりけんとおもへど、そゞろに、寒きこゝちす。下の一目千本に、御野立有り。こは、里人北村氏の、たてゝ、まちまうけ奉れるよしにて、清らにしつらひたり。花は、のこらず散りはてたる中に、たゞ一もと、さかりにさきにほひたる、おくれし色ともみえず、いとめでたし。すこし、あゆみ出でみるに、小出ぬしも、出できて、常に、一目千本といへど、けふは、千目一本也。これぞ、けふの書きところなどいひしは、なまじひの歌よまんよりは、中々にをかしかりき。高倉

典侍、
春過ぎしよしの丶山の櫻花君のためとや咲きのこりけん」。柳原權典侍、
みそなはすけふ待ちがほに芳野山殘れる花のなつかしきかな」。生源寺權命婦、
いでましの今日を待ちてかよしの山一もと花のちり殘りたる」。よまでやまんも、本いなけれど、
中々にさきおくれたる一もとの花はまれなる春にあひけり」。なほ多かれど、さのみはとて、もらしつ。さかりならんには、げに、雪とも、雲とも、たとへんかたなかるべし。ながき山道に、てうちん、かけつらねたる里人の心つくし、あはれと御覽す。藏王堂にのぼらせ給ふ。元弘のむかしがたりを、まのあたり聞くも、そゞろに寒し。それより、吉水の神社にまゐり給ひて、後醍醐天皇の御木像を拜し給ふ。つねに住ませ給ひし方に、あないしたてまつる。上段には、御簾かけわたして、御おとねましゝ世のまゝに、今も奉れり。おくの方に、つねのおましとおぼしき所に、宸翰、御手馴のみてうども、かざりて、宮司、ゆゑよしども啓す。餘りに、むねふたがれど、すべりいでゝ、外をみいだしたるに、軒まで、雲たちおほひ、

いとゞ、しめりがち也。宮の、物にかゝせ給へるを見たてまつれど、
村雨ははれたる今日もふりし世の宮ゐたづねて袖ぬらしけり」。御まみの、うるはひがちにのみ見奉らる。

文の上に見てもかなしきみよしのゝよしのゝ宮をあふぐけふかな」。逆臣の爲に、都をはなれさせ給へるだにあるを、かう、所せき所にて、つひに過ぎさせ給ひにけんと、今、はた、うらめしくも、悲しくもこそ。かたへの木立、物ふりて、すごき中に、村々まじれる花は、散りはてたり。柳原權典侍、

宮ゐせしむかしおもへどみよし野のよし野の春もかなしかりけり」。生源寺權命婦、

よしの山のこる宮ゐの跡とへど杉の雫に袖ぬらしけり」。とり／＼にかなしうて、
心有りて散りはてぬらん山櫻花にかくさむ所ならねば」。源義經のひそみし間は、はしつかたに有り。みすのまへよ、鏡、打ちかけて、遙拜所になし置けりとぞ。出づる道に、大きなる岩に、いかめしき釘、打ちこみてあり。辨慶のしわざ也とか。こゝより、塔尾の御陵にわたらせ給ふ。さかしき山路にて、おりてはのぼり、のば

りてはおり、人々、こうじはてぬ。むかひの山は、みねより、ふもとまで、杉たかり也。いかなる獣が住むらんと、すごきこと、いふばかりなし。ふかき谷のはざまを、つたふ水の音は聞こえながら、雲ふかくして、さやかに見えず。みさゝぎには、老木、くらう生ひしげりて、いとゞ、かきくらさるゝ心地す。をがませ給へるみ心ち、いかにおはしますらん。

よし野山みさゝぎちかくなりぬらし散りくる花も打ちしめりたる」とよませ給へるを、後にうけたまはりて、更に、打ちなかれぬ。むかしにかへりたる御代の光に、今ぞ、太御心のくもゝ、はれさせ給ふらん。柳原權典侍、

塔尾のみ山さびしきみさゝぎに涙の外は何をたむけん」

副島伯爵校閲
東久世伯爵著　松本楓湖畫

尋常小學修身入門　全一册　上製二錢八厘

仝　教師用　全一册　上製七錢

尋常小學修身書　全四册　每册七錢八厘

仝　教師用　全四册　上製各册十二錢

高等小學修身書　全四册　每册九錢七厘

仝　教師用　全四册　上製各册廿五錢

中學國史　全六册

高等小學國史　全三册　每册十九錢

尋常小學國史談　全二册　全十錢

發兌所　國光社

女鑑第六十號目次

女鑑
思想の發達さ養成

論說
恭儉己を持し博愛衆に及ぼす……細川潤次郎
女子教育さ婦德さの關係……黑河內與四郎
女子處世論（緒言）……三輪田眞佐子

史談
鈴木のぶ子……鹽井雨江
孝婦春か事……滿城弘

家政
看護法捷徑（三十五）……三笠舍主人

漫錄
あらすもがな（三）鹽井雨江●道の志たり歌合（八）久志本常孝寄贈●帶のむすびかた（圖入）井上頼文●てりく坊主小山田與淸●草根集（つゞき）●主の仇を討ちし下女
忠孝二筋道（其一）……渡部乙羽
花菖蒲（其五下）……千稻子

文林
歌
近衛忠凞●東久世通禧●佐々木高行●鍋島直大●前田利鬯●宮地嚴夫●小出粲●谷勤●坂正臣●梔松石經●內藤存守●藤井行麿●岡部譲●片岡正占●上地信光●西川須賀雄●糸山貞幹●草野隆道●千日亮●佐藤恭順●野崎宗英●蜂須賀隨子●松平健子●鳥尾廣子●諏訪晴子●安東菊子●片岡光子●賀小川昌子●河原崎梅野●海上壽子
文
女のつさめ……田邊わけ子
古人苦學……師岡須賀子
始聞鷩……勝家眞民

雜報
東西比觀●女子高等師範學校卒業證書授與式●東京府高等女學校●また貞女ふで●孝子さ順婦●湖上の美人を讀む（多感生）

敎の庭
狀文 數十首

餘芳
みちのつこ（つゞき）……小池道子
口寄 鈴木のぶ子……高橋松亭
掃葛 小說忠孝二筋道……富岡永洗

社告

〇代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事〇郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事〇郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事〇別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事〇未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回發行 五日 廿日

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年四月十九日印刷
同年同月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人 川崎直衞
同 編輯人 山根勇藏
同 發行所 國光社

（印刷所 東京國光社印刷部）

〔明治二十四年八月八日內務省許可〕
〔明治廿五年三月十二日遞信省認可〕